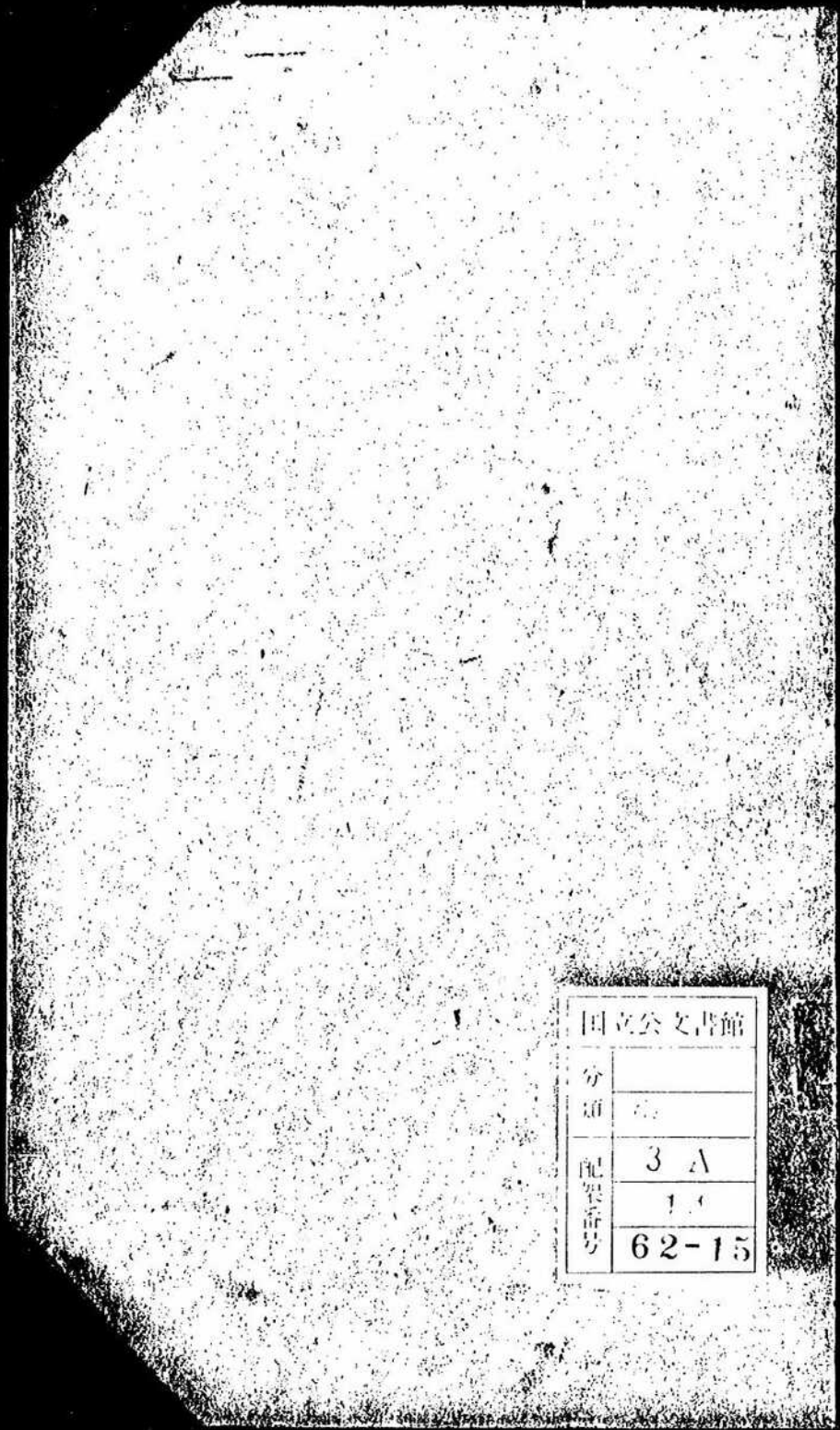




国立公文書館	
分類	③ ④
配架番号	3 A
	14
	62-15

10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



国立公文書館	
分類	
配架番号	3 A
	10
	62-15

11

0
985

49074

0
985

東
洲
の
政

東
亞
研
究
所
藏
書
印

東洋資料館第三九號

昭和十七年一月
陸軍省主計課別荘

めくれず

例 目

- （一） 本資料は最近に於ける満洲の政治・經濟・軍事にわたる諸情況を勞めて系統的に調査研究せるものである。従つて体系的なる分析的究明の如きは本資料の目的の範圍外にある。
- （二） 満洲經濟に關する各種の研究については別冊「生産發達より見たる満洲及新亞細亞の現況」を參考に供せられたい。
- （三） 本資料の内容は総論附記の要旨に略述せられてある。

昭和十七年一月

陸軍省主計課別班

目 次

- 一、 政治的動向
- 二、 軍 事
- 三、 財政金融
- 四、 工 業
- 五、 原料及食料
 - 一、 牧 畜
 - 二、 畜産及び養鳥
 - 三、 農 業
 - 四、 林 業
 - 五、 礦 業

(一) 澳洲は民族・文化・生活様式に於いて概ね英本國と同質なるを特色とし、聯軍中最も英國化せられゆり、加之經濟的國防的連携關係亦頗る密なるを以て、その政治的意欲は飽まで英國と運命を共にせんとするにあらざるべく、對本國離反の如きは凡そ考へ得られず、

(二) 現在陸軍兵力は在外派兵約九萬、在派兵約二一萬、計約三十二萬と見られ、機械化程度にも相當見るべきものあれども、人口稀少のためその動員能力は大に六十萬前後と推定し得べし、海軍は現有艦艇、計畫中の艦艇各十二隻の如く、兵員數は現役・豫備を含み約一萬二千程度、空軍は現在保有機約二百、兵員約四千なるも目下大規模に擴張中なり、

(三) 財政的には國防費の激増に迫はれをり、對本國戰費への寄與能力

なし

(四) 工業は消費財生産を中軸とせるも近年金屬機械工業の隆進眼望しきものあり、特に最近軍需生産部門を急激に擴充しある事實は大平洋方面に於ける、英帝國の兵器廠として注目し値すべし

(五) 食糧及び原料の見地より見れば各種の補助性原料・肉類・酪農類及び麥類を最も多量に産し、若干の金屬資源と、もに英本國に供給せられらるるも戰時中は糧食力に於いて大いに制限を受くべし。

以上

一、政治的動向

オーストラリアは今次ヨーロッパ大戦開始前から今日に至る迄、大
体に於て終始一貫イギリスの外交政策に追従し、イギリスの對戰政策
を支持して來たと一般的に確言することが出来る。極めて有力なる反
對黨たる労働黨は開戰前に於て孤立主義的主張を持し「北半球の戰爭
にオーストラリアを巻き込むな」と唱へ、開戰後漸くの間オーストラ
リアの戰爭深入りに對し消極的な慎重態度を要望してゐたが、それも
政府の積極的參戰政策を實質的に妨害する程度には達せず、今日にあ
つては労働黨を始め各政黨及び各社會層が全國民一体となつて英本國
に對し全幅的支持を捧げ、且つ益々その支持を強化しつゝあるのであ
る。

かゝるオーストラリアの態度はオーストラリアがイギリス國家聯合
即ち所謂大英帝國の一員たるのみならず、未だ母國たるイギリスに對

し、母胎から完全に離脱し得て居ない程の高い從屬性を有してゐることとその基本的理由が見出せるが、この點については特に次の如き諸點が重要因子となつて居る。

(一) その第一は民族的理由である。

オースト

ラリア國民がオーストラリアの國策たる白豪主義の結果歴倒的に白人而かもイギリス人より成ることは云ふ迄もない。この點に於てオーストラリアは異民族たるアイルランド人より成るアイン共和國はもとよりポーリア人及びバンツ族に歴倒的多数を制され、イギリス人が極めて少數な南阿聯邦、多數のフランス人を含むカナダ等の各自治領と趣を異にし、民族的に云つて殆ど全くイギリス的要素によつて獨占せられてゐるのである。即ちオーストラリアは政治的內部分裂を來たす民族問題を有して居ないのである。

(二) 右の結果としてオーストラリアの言語、文化、生活及び傳統は純粹にイギリス的なものであり、オーストラリアの社會が如何なるも

のかを手つ取り早く説明せんとすれば、イギリス本國の社會を、その封建的貴族的要素と高度に發達した金融資本的要素とを取り除き、自由主義的及びチャーチスト的要素を主成分としてオーストラリアの土地に移植した如きものである。と云ふ導が出来るのであつて、これは又同時に單なる説明の爲の比喩に當まるのみならず多分に歴史的事實でもある。その上輿論就中國民の對外態度の形成に對し最も重要な要素たる海外からの諸報道が、殆ど全部イギリス官憲の手に依つて加工されたはイギリスの通信社を通じて供給されて居り國際的條件に關し獨言の報道蒐集組織を殆ど有しない状態にあることも右の如きオーストラリア國民の英國依存的心理を維持せしめ國際的問題に對し英國人と全く同様な感情及び政治的態度を表はせしめるに與つて大きな力があるのである。

(三) 次にオーストラリアは英本國に對し今尙經濟的に依存してゐることである。即ち先づオーストラリアはイギリス資本の最大の投資地で、イギリス海外投資の約六分の一はオーストラリアに存在してゐる。

イギリスの海外投資（一九三六年）

オーストラリア	五〇五百萬磅
印度（セイロンを含む）	四三八
カナダ（ニュー・ファンドランドを含む）	四四二
南阿（ローチシアを含む）	二四八
ヨーロッパ	二三六
南米	六六七
合衆國及び中米	一三三
海外投資總額	三、二四〇

かくてオーストラリアはロンドンの金融市場に依存してゐるのみならず戦前に於てその輸出の五〇%乃至五五%、輸入の四一%乃至四三%はイギリスが占め、爲に景氣の變動の如きも幾らかのタイム・ラッグをおいて殆ど英本國に於ける變動を模寫する倅きがあり、これが政治にも反映してイギリスの政治的動向は半年か一年程遅れてオーストラリアに再

現するのが常であると云はれて居るのである。

(四) 従來と雖もオーストラリアと英本國との關係の基調に對し根本的な意味を有してゐたが現在特にその意義が現實的な切迫感を伴つて顯現して來たのは國防上の問題である。オーストラリアの面積は（約三百萬平方マイル）アメリカ合衆國に略々等しい。而かもそこに住む住民は僅か六百九十三萬（一九三八年推定）でニューヨークより少きこと五十萬又東京より多きこと五十萬と云ふ状態であるから國土防衛が自力で不可能であることは一見して明らかである。そこでオーストラリアの國土防衛の戦略は英本國艦隊（現在ではアメリカ艦隊も英艦隊に準ずる）を利用しこれを幾分か三國空軍で援助しつゝ進攻し來る敵がこの島大陸に上陸しない中に洋上に出撃する建前を改つて居るのである。この點は現實の政策に於て最も決定的なものであるがこれは更に詳説を要しない程常識化してゐるものである。たゞ現下の樞軸障營の對立の中に於て英海軍の保護を受けるにせよ米海軍の保護を受け

るにせよ距離の點に於て又列強の戰略配置の點に於て英自治領中最も保護を受けるに困難であり従つて戰略的に最も劣弱なのはオーストラリアであるが、その故にこそまた益々自國の安全に脅威を感じ各自治領中、英海軍（英海軍に準じて米海軍）の保護を最も強く要望してゐるのはオーストラリアであることを行言するにとゞめる。

如上の如くオーストラリアを英本國に結びつける諸要素は民族的、文化的、經濟的に又は政治的、軍事的に或はまた傳統的に現實政策的に極めて強力なものである。このためオーストラリアはイギリス自治領中英本國から最も距離が遠いにも拘らず英本國に對し最も密着親近な依存關係を持つに至つてゐる。オーストラリア國民はポリア人の反抗的態度に悩む南阿在住イギリス人とともに「イギリス人よりもイギリス人である」と云はれる程に強烈な本國に對する忠誠を脱中その對外態度に於て傳統的に保持してゐるのである。

過去に於て日英同盟、その後ハワントン條約によつて自己の地位

に安全を感じて南阿の島大陸に桃源の夢を貪つてゐたオーストラリアは數年來悪化して來た世界的葛藤に處して英本國の海軍に頼るは勿論のこと、自己の領土を基地として提供することによりアメリカ海軍の保護をも受けんとしてゐるが、自己の國防力の劣勢も手得つて世界的紛争の激化及びこの紛争に對する強硬政策を好まず常に宥和政策に傾いてゐた。ミュンヘン危機に於けるチェンバレンの宥和政策に最大の支持を示したものは自治領中ではオーストラリアであつた。併し宥和政策のデグゼグの過激を苦惱しつゝ遂に宣戰に迫りつゝいたチェンバレンの政策はオーストラリアの如き平和主義と孤立主義の支配してゐた自治領を英帝國の側に確保するものとしては悉らく最上のものであつた。この困難な過程にオーストラリアは情勢の深刻さと戰爭不可避の實感を植えつけられ自己の決意を定める時間的余裕を與へられたのである。一九三九年九月英帝兩國が對獨宣戰を布告するや、日と同じく對獨戰を布告し得たのはオーストラリアのみであつた。從來平和主義

と孤立主義を唱へてゐた労働黨もこれを承認した。臨時憲法オーストラリアの政權は第二黨たるオーストラリア黨單獨の手にあり各黨の勢力關係は次の如くであつた。

	上院	下院
オーストラリア黨	二〇	一九
地方黨	一六	一四
労働黨	一六	一七
計	三六	三六

二十七日の議席しか持たぬオーストラリア黨は僅かに地方黨の是々非々の支持を得て政權を維持して居た。従つてその地位は内政問題に於て極めて劣弱であつた。その上對歐政策にも野黨たる労働黨との間に若干の意見の相異があつた。現駐米公使ケイシー氏が公使就任のため下院議員を辭した結果、一九四〇年二月に行はれた補缺選挙は野黨兩

派の對歐政策のテストとして正式に認められて議はれたもので兩派の綱領はそれぞれ次の如きものであつた。

- 労働黨
 - 一、遠征軍派遣反對
 - 二、オーストラリア内に於ける海軍の國防増強
 - 三、軍事的手段以外による聯合軍の維持
- 但し、海軍派遣軍の維持並びに個個は帝國空軍訓練計畫に對するオーストラリアの負擔の如き既存の決定の履行等は承認した。

與黨

- 一、徹底的な海軍
- 二、總選挙によるの外軍兵隊を起行せず

 この選挙に於ては與黨たるオーストラリア黨は完全に敗北したが、併しその結果として地方黨を内閣に参加せしめることが出来、却つてその地位は強化した。地方派議員を代表する地方黨はオーストラ

リア黨以上に積極的な對戰政策を主張して政府を手こずらせてゐる
態であるが、政府はその支持を得て然るヨロツバ政策に深入りし
ヨロツバ黨を崩壊せしめ英本土に於いてその地位を固めるや勞働黨の懸
念も一變した。即ち六月十九日の議會は次の如き方針を決定した。

- 一、戦争に於ける聯合國との完全不可離の結合。
- 二、オーストラリアの防衛及び戦争遂行のため全資源を政府の統制
下に置く。
- 三、軍需生産の促進。

既現行國防法による國民軍訓練を急高の標準の下におく。適當
な体育訓練組織を作る。帝國陸軍訓練計畫への全體的参加。オ
ーストラリア帝國軍（海外派遣を目的とする軍）増強のため
適當なる措置。但しヨロツバへの軍需生産はヨロツバの戰
局及びオーストラリア自身の防衛を考慮して決定すること。

この決議によつて勞働黨は連征軍の派遣の程度に若干の考慮を留保
する外政府の對戰政策に全面的に一致するに至り、これら政策の實施
のため勞働黨をも含めた戰時諮問會議の創設を提唱した。かくて愈々
オーストラリア勞働黨も六月十日成立したチャーチル内閣下に於ける
イギリス勞働黨と同様の線に沿ふ協力政策に乗り出したのである。か
くて政府も益々參戰徹底化に活発をかけ七月には從來の「國家安全法」
を修正してイギリス本國の緊急國防大權法と同様の權力を獲得した。
即ち「政府は國民に對し國民自身及びその勞力財産を政府の處理下に
おくことを要求する權能を有す」と規定したこの法案は下院を六一對
九・上院を二七對三の壓倒的多数で通過した。そこで政府は更に一步
進めてオーストラリアにも參國內閣或は戰時執行會議の設立を計畫し
たが勞働黨は國內政策の對問題に對して異見を有するが故に行政的な
責任は引受けられないとの理由からこれを拒否した。而して九月に於
ける日獨伊三國同盟の成立並に總選舉の結果として與黨の勢力が一層

弱くなつた爲、益々労働黨の支持を必要とし遂に労働黨の提議を容れて閣員四名、労働黨四名より成る臨時閣内會議が十月下旬に設置を見た。かくて對英政策に關しては一應の協力方式が出来たが國內問題即ち主として臨時經濟及びこれに原因する社會労働問題に關しては尙朝野兩派の間には相當の對立抗争が見られ十二月には豫算問題を廻つてこれがデッドロックに乗り上げ労働黨側では一舉に倒閣に邁進せんとする動きさへ見られたが僅かに妥協したことさへある。併し労働黨首領カーチンは三國同盟成立以後國內問題による協力の必要を痛感してをり殊に最近に於ける東亞情勢の緊迫化はこれに益々拍車をかける方向に向ひ更に西歐及び東亞の憂慮がより一層深刻の度を加へればオーストラリアにも英本國式の強力暴行内閣が出現し國內的對立は漸次消極化して行くものと豫想される。

かくてオーストラリアは漸次最高限度の對英努力を続ける方向に進んでゐるが、その對英努力は前大戦の場合とは格段の相異があること

を一般的にこゝに附言しておかう。即ち前大戦に於ける對英援助は専ら海軍と空軍その他の原料物資によるものであつたが、今回の大戦に於ては今迄の所望軍による援助よりも空軍により大なる重點が於かれ原料資源と並んでオーストラリア製の各種完成軍需品に多大の期待が懸けられて居る。他方前大戦には東亞の戰火は極めて小規模に限られてゐたが今次大戦に於ては東亞方面にも深刻な危機が存在してゐる關係上オーストラリアの對英援助は歐洲に於ける戰線のみならず東亞方面についても十分考慮されねばならない。オーストラリア労働黨が海外派兵よりも自國國防に重點を置てゐるものもこの點から見れば單なる孤立主義的先入見に基くものとは言へず、他方オーストラリアの防衛はシンガポールを中心とするイギリス東亞防衛隊を無視しては考へ得られないものであるから、實は労働黨の主張は對英援助に消極的であると云ふよりむしろ東亞に於ける對英援助に對してより積極的であると云ふ傾きを持つてゐるのであり、また一九四〇年十月廿五日から一

ケ月に亘つてインドのテリで開かれたスエズ、南阿以東イギリス帝國
十一屬領の東方軍需會議も主として東地中海方面の需要を考慮したも
のではあつたが、それは同時にイギリス東亞防備等に對しても多大の
貢獻をなすものであることは看過出來ない。

二、軍 事

一八八五年フアンドン事件の際ニュー・サウス・ウエールズ州首相
ダリーは一部隊の兵員をスタンに派遣するに當り「爾今世界の平和を
擾亂する一切の政治家はイギリスに歸する限りその本國の甲鐵器、陸
軍だけに己の教養を限定しないであらう」との聲明を發したがこ
の方針はその後長くオーストラリア軍の傳統となつてをり、一八九九
一八九〇二年のボリア戦争及び一九一三—一八年の歐洲大戰等イギリ
スの行ふ戦争には必ず派兵を實行してゐる。而もオーストラリアは自
己自身の國家防衛の爲めには一度も戦つたことがないのであり、そのた
重傷はイギリスの必死に應じイギリスのため存在するかの感がある。そのた
平時兵員はこれを最大限度に少數に削減し、一旦有事ある場合にはこれを最大限
に動員する工夫を重備に施して居るが、元來土地廣大なるにも拘らず
人口稀少のためその可能動員數も余り多くを期待出來ない状態にある。

オーストラリアに於ては十二―十八才の青少年は青少年軍訓練を受け、また十八才―六十才の男子は戦時兵役義務を負ふのであるが、右の年齢に該当する男子数を一九三三年の国勢調査により精出すれば次の如くである。

十二―十八才	三七一	千人
十八―二十六才	四八二	
二十六―三十五才	四七二	
小計十八―三十五才	九五四	
内獨身者	六二〇	
三十五才―六十才	九七二	
合計十八―六十才	一、九二六	
男子總數	三、三七八	
人口總數	六、六五六	
一九三八年推定男子數	三、五〇四	

同 右人口 六、九二九

右の中最も強壯な年齢に屬する十八―三十五才のものと雖もその中には勿論不適格者が含まれて居り、他方これを全部動員することは經濟的社會的機能を疎痺せしめることとなつて不可能であるが前世界大戰に際しては四十一萬二千九百五十三人を動員し（一九二〇年の男子數二百七十五萬、人口總數五百四十二萬）三十二萬九千八百八十三人を戦線に送つたのに對比すれば現在にあつては恐らく五十萬乃至六十萬の兵員を動員し得るものと見られる。

一陸軍

現在の陸軍組織を遂行するために必要な歴史的專項を漏記すれば次の如くである。

- (一) 一九〇二年各州の軍政が聯邦の管理下に移され統一的重隊となつた。
- (二) 一九〇三年、十八―六十才の全男子に對する戦時一般強制兵役

義務（これはオーストラリア内の勤務に限り海外派遣は志願制）
を規定する國防法の施行。

(四) 一九〇九年平時に於ける一般強制軍事訓練法が發布され一九
一一年實施。

これは十二―二十四才の男子に適用されるもので徵集者は民兵を
構成する。

(五) 世界大戦中海外派遣兵を徵兵制によつて徵集するため努力が
拂はれ二回の國民投票が行はれたが實現しなかつた。今次戦争に
於てもメンヂース首相は海外派遣のための徵兵は行はない旨言明
してゐる。

(六) 一九二一年師團管區制を採用、師團兵員を最少限に減少、更に
翌二二年からはこれを中核兵員にだけ限定した。

(七) 平時一般強制軍事訓練の停止、民兵は志願制となる。
(八) 一九三九年戦時強制兵役規定發動。

戦前の兵力（一九三八年十二月）は

常備兵 二・七九五

豫備將校 六・二四七

民兵 四二・八九五

（民兵は一九三九年三月七〇・〇〇〇となつた）

であつた。常備兵は服役期間は五年でたゞ中核兵員のみより成り主と
して民兵の教育に當つて居た。民兵は十八―四十八才の年齢の志願者
よりとられ服役は三年で一年間に十八日の訓練を受ける。更に右の外
八・八九九名の青年訓練生、約五千の小銃クラブ員も歸隊後の兵員補
給の基礎となつて居た。

今次大戦勃發後は愈ビツチで兵力の大擴張がなされたことは云ふ迄
もない。先づ常備兵を約一萬に増加した外海外派遣を目的として志願制
により二萬の英帝國義勇兵が徵募され、一九〇三年の臨時強制兵役制

(オーストラリア内に於ける服務に限定されてゐる)の發動により、その際メンヂース首相は海外派遣のための徵兵制は總選舉に訴へることなくしては實施せずと首明した。一應訓練兵の徵集が行はれて英帝國遠洲軍への参加及び軍需工業への就業のため兵員の減少を來たした民兵は八萬に増加された。翌一九四〇年三月政府は遠征大擴張計畫を決定。

英帝國遠洲軍

九萬

民兵

七萬五千

常備軍

三萬

とする旨發表した。而して一九四〇年七月末の兵員は在外英帝國軍八萬、(一九三九年十二月、四一年三月、六月、九月の四回に亘つてパレスチナ、英本領、エジプト等に派遣された)在遠洲軍十萬五千にまで達した。然し同年五月、六月の巨部戦役における大敗北の結果戦争の將來を危惧してオーストラリアは一時海外派遣を停止するとともに更

危機の激化に備へ専ら三國同盟の強化に努める方針をとつた。八月初旬の政府發表によると九月から十二月までに十二萬の新義務及び志願兵を召集することに決定を見てゐる。遂えて翌一年に入つてはシンガポールへも英帝國遠洲軍一萬を派遣した。

かくて現在(一九四一年三月末)のオーストラリア陸軍兵力は在外英帝國遠洲軍約九萬在遠洲軍二十一萬合計約三十萬程度に達してゐる。その上訓練も著しく強化され戦前民兵にあつては一年間十八日程度訓練に過ぎなかつたものがその後漸次増加されて今日では七十日程度の訓練を行ひ、また元來オーストラリア軍は前大戦のアンザック軍團の傳統を以て實的に優秀とされてゐるが、最近では機械化の程度も著しく進み一師團當り二千臺の自動車を有するに至つてゐるが一九四一年に入り更に装甲自動車及び戦車により大規模な機械化を促進することになつてゐる。

右の如くスエズ以西の戦線に對するオーストラリア陸軍の兵力的援

助は余り大きくない。併し元來今次大戦に於てオーストラリアは陸軍よりもむしろ空軍及び海軍を以て中心とする方針をとつてゐるので、現在海軍の兵力派遣もオーストラリアとしては相當大なる援助と見るべきであり、而かも今次大戦は前大戦と異り東亞方面にも深刻なる危機を伴つてゐるのであるから、例へスエズ以西に大軍を派兵せずともオーストラリアが自國の防衛強化を計畫してゐることとそれ自身が東亞に於ける重大なる對英援助的性質を有することは看過出來ない。

三海軍

オーストラリア海軍は一九一三年に始めて創設されたのであるが一九三八年六月に於けるオーストラリア海軍現有勢力は次の如くであつた。

(イ) 就役艦

巡洋艦	キャンベラ	九、八五〇
同	シドニー	七、〇〇〇

同	アデレード	五、一〇〇
驅逐艦	ヴェンデッタ	一、〇九〇
同	ヴォエヂヤー	一、一〇〇
同	ヴァンバイヤ	一、〇九〇
護衛艦	スウオン	一、〇六〇
同	ヤラ	一、〇六〇
航空母艦	アルバトロス	四、八〇〇

(ロ) 豫備艦

巡洋艦	オーストラリア	九、八七〇
駆逐艦	ステュアート	一、五三〇
驅逐艦	ウォーターヘン	一、一〇〇

計 十二隻

右の中オーストラリア製の航空母艦アルバトロス號(四、八〇〇ト)は一九三八年九月イギリス海軍に譲渡され、また巡洋艦オースト

ラリア號は改装を施して今次大戦に出動した。而して一九三九年初頭オーストラリアは三ヶ年六千三百萬オーストラリア・ポンドで次の如き海軍擴張計畫を實施した。

巡洋艦	二隻
驅逐艦	二隻
護衛艦	二隻
航洋防衛艦	三隻
水雷艇	十二隻

右の中巡洋艦二隻はイギリス海軍からホバート（六九八〇トン）、パリス（七〇四〇トン）を譲り受けたが、他は皆オーストラリアで建造に着手した。（尙一九三九年三月の現有勢力表によると測量艦モリスビー號（一、六五〇トン）、機送船ペンギン號（三、四三五トン）、油槽船クランバ號（七、九三〇トン）等がある。

その後右計畫による小巡洋艦並に多数の補助艦によつて漸次オースト

ラリア海軍は増強されてゐるがその詳細は明らかでない。尙右計畫後に於ても新計畫が採用されており、例へばメンヂース首相は一九四〇年五月沿岸防備のため海軍を増強するとともに三百萬ポンドを費し即時主力艦の建造に着手する旨發表し、その後も引續き新艦建造を計畫造船所の擴張も行つてゐる。尙オーストラリアは歐洲水域で使用する驅逐艦、警備艦をも建造中であるがその詳細は不明である。

メンヂース首相は一九四一年二月トライバヌ級（一、八七〇トン）驅逐艦五十隻建造を目標とする旨確言

海軍兵員は一九三九年二月の計畫によると、

士官 兵

現役	四九〇	四、七五八
豫備	四二五	三、八九〇

となつて居るが、開戦以來現役兵員は二倍以上になつて居ると云はれ

る。(一九四〇年十月エコノミスト紙は一萬二千名と計算して居る。オーストラリアは従来イギリス海軍に依存する方針であつたからその海軍は微力であるが、一九三八年の危機以來自立國防の建前から空軍と海軍の擴張に力を入れて來た。とは云へ海軍の擴張には經費と時日を要する關係上未だ當然微力であるが、今次大戰勃發後は地中海へも軍艦を派遣し紅海・印度洋等に於てイギリス海軍に有力な援助を與へてゐる。併し艦隊の動きの詳細は不明である。

三空軍

オーストラリアが最も力を入れてゐるのは空軍の擴張で、その大陸的地勢やこれに基く平時民間航空の發達等の點で頗る有利な地盤を有するものと云へる。開戦前(一九三九年六月)の空軍勢力は政府統計によると次の如くであつた。

常備軍	士官	三一三名
兵		三七九一
市民軍	士官	一一七

兵

四三五

而して休有機数は練習機その他各種片機合計凡そ二百機程度であつたと見られる。

オーストラリアは一九三九年以降三ヶ年計畫三千萬オーストラリアポンドで空軍擴張を行つてゐるが、その目標はオーストラリア空軍機三千機の整備を目的としてゐる。この計畫は着々として進行して居り一九四〇年十月にはシンガポールのイギリス空軍がスエズ以西に引揚げたのに對し之が補充をオーストラリア空軍で行ひ更に一九四一年二月にはこれを増強してゐる。

併しオーストラリアは右の外英帝國空軍訓練計畫に於てイギリス空軍に對し直接多大の貢獻をなして居る。開戦前オーストラリアはイギリスとの間に諸戰即時六個中隊の空軍を派遣する約束を結んで居たが、その後英帝國空軍訓練計畫が計畫されるに及び先の約束を取り止め専ら英帝國空軍訓練計畫によつてイギリス空軍を援助することゝなつた。

本計畫はオーストラリアのみならずカナダ及びニュージーランドをも含むものであるが、最初は最終訓練を専らカナダで行ふ方針で計畫全体が余りにカナダに集中されて居たが、後部の自治領の立場を尊重して最終訓練の一部を他の自治領でも行ひ、訓練施設及び訓練兵をも地元自治領に利用せしめ得ることとした。最後の計畫は一九三九年末に決定され、一九四〇年初頭より實施を見てゐる。

右計畫に於けるオーストラリアの關係部分を見るに三ヶ年計畫で總計一萬四百名、陸軍士、無電通信士、砲手一萬五千六百名並びに地上勤務員約三萬名を養成することを目的としてゐる。而して前述の如く初等訓練は全部オーストラリアに於て行ふが最終訓練は一部オーストラリア、一部カナダで行ひ、養成された兵員は大部分イギリス空軍に編入されるが一部はオーストラリア空軍にも編入されることとなつてゐる。而してこの計畫のための所要機数は約千四百五十機とされてゐる。

この計畫に對するイギリス側の負擔は教官を派遣する外高等練習機の全部、初等練習機のエンジンの半數、初等練習機の費用の一部並びに消滅機の償却費全部を提供することになつてゐる。その他の費用及び人員はすべてオーストラリア側の負擔であるがその費用合計は三ヶ年で五千萬オーストラリア・ポンドを超過するものと見られ、その内譯は資本的経費凡そ二千萬ポンド、毎年経費千五百萬ポンド程度と豫想されて居る。

この計畫を進めるには重要區域から熟練労働者又は訓練に適する労働者を得なければならぬためそこに多大の困難があるが、志願者數は極めて多數に上り一九三九年六月には既に十二萬五千名に達した。而して一九四〇年末の訓練進行状況を見るに乗員一萬四千名が登録され、中約四千人が實地訓練を受け、地上勤務員總數二萬名が實地に就いてゐる。新規建設訓練所三十六ヶ所中年末迄に二十一ヶ所が開設された。初歩訓練は豫定より二十五パーセント程多く進捗し、戦前にあつ

ては二百名の繰繰士を訓練するに八ヶ月を要したものが今や一ヶ月に二百名を訓練し得るに至つたと云はれ、オーストラリアで初等訓練を受けた練習生は昨年夏頃からカナダに送られてゐたが一九四一年初頭には訓練を完了してイギリスの戦場に現はれて居る。尙右の外昨年十月からは南ローデシアの余力ある訓練施設を利用するため毎月四十名、宛の練習生が同地に向けて送られることになつて居る。

三、財政金融

オーストラリアはイギリスに對し直接の財政的金融援助を與へる能力はない。約五億英ポンドの對澳投資の一部動員の可能性とその利子配當支拂額二千八百萬ポンド（一九三九—四〇年度）がイギリスのオーストラリアから得る金融上の貢獻であるが、これは通常の援助とは云へないこと勿論であるのみならず、オーストラリアは従來ロンドンの金融市場に依存して居た。最近に於てこそロンドンでのオーストラリアの起債は減少したが而も一九三九年に入つてからでさへ同年六月七千五百萬ポンドの公債、十二月には海外戦費に充當するため四十億ポンドの公債、又一九四〇—一年度にも海外戦費のための四千五百萬ポンドの公債をロンドンで募集せねばならぬ状態である。従つて金融的にのみ云へば、オーストラリアはイギリスの負擔となつてゐるのである。

オーストラリアの財政状態は一九三一年以降比較的健全な推移を示す

して来たが、一九三七年を絶頂として一九三八年には再び輸出価格が低下しこれが財政状態に影響して財政收支を悪化せしめる傾向を示した。處が一九三九―四〇年には輸出価格が前年に比し約二十五パーセントの回復を示し、又全輸出が一億六千八百萬ポンド（前年に比し二十五パーセント増加）と云ふレコードに達し財政上有利な発展を示したのであるが、公債は開戦と共に国防費の増大と云ふ側面からその財政は漸次緊迫を告げて來てゐる。

戦前及び戦後に於けるオーストラリアの歳出入は次の如くである。
 （單位千オーストラリア・ポンド、以下ポンドは特に記さない限りオーストラリア・ポンド）

年	普通歳入	経費總額	内 普通歳入から	公債から
一九三六―七年	八二、八〇七	八四、二四二	八一、五三一	二、七一〇
一九三七―八年	八九、四三八	九〇、五一二	八五、九六三	四、五四九
一九三八―九年	九六、〇六四	九八、〇三一	九四、四三七	三、五九三

年	一九三九―四〇年	一九四〇―一年	一九四一―二年	一九四二―三年
普通歳入	一一一、九〇〇	一四〇、〇〇〇	一〇九、〇〇〇	三八、〇七六
経費總額	一五〇、一〇〇	二七四、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	一二四、〇〇〇
内 普通歳入から				
公債から				

（一九四〇―一年は一九四一年修正予算）

云ふ迄もなく開戦後の経費膨脹は激甚で、普通歳入も相嘗の増大を示してゐるが而も膨脹する経費を賄ひ切れなく公債收入に頼つて居る。普通歳入増加の爲めの増税は一九三九年六月約八百萬ポンドの輕微な増税が行はれたとて戦争勃發直後の一九四一年十一月預算では全く行はれず寧ろ公債收入に頼つたのであるが、一九四〇年五月の一九四〇―一年度預算では約二千萬ポンドの増税が行はれ更に十一月には三千百萬ポンドの増税を行つた。その内訳は次の如くである。（單位千ポンド）

税種	五月	十一月
所得税	四、〇〇〇	二三、五〇〇
販賣税	五、〇〇〇	三、四〇〇

地租	九、五〇〇	四、四〇〇
計	一、五〇〇	三、三〇〇

かくて各年の税収入は次の如くとなつた。(單位千ボンド)

一九三八年	九年	七匹、〇三六
一九三九	四〇年	八三、八〇〇
一九四〇	一年	一五〇、〇〇〇

一九三八―九年は普通歳入中二千三百萬ボンド、一九三九―四〇年は二千八百萬ボンドの税外収入があり、一九四〇―一年の税外収入も右兩年度に準ずる程のものがある筈であるが分りでない爲めその額として置く

一九四〇―一年の預稅收入内諺を示せば次の如くである。(單位千ボンド)

販賣稅	二〇、四〇〇
-----	--------

個人所得稅 (註)	三三、〇〇〇
-----------	--------

法人所得稅	五、三〇〇
-------	-------

關稅	四五、一〇〇
----	--------

その他稅收	四五、一〇〇
-------	--------

内直接稅	二八、四五〇
------	--------

間接稅	一六、六五〇
-----	--------

合計	一五〇、一〇〇
----	---------

(註) 個人所得總額七六四萬萬ボンド

次ぎに經費の側について文治費を示せば次の如くである。

文治費	七六、一八二
-----	--------

一九三六	七年	八〇、七七九
------	----	--------

一九三八	九年	八一、〇二六
------	----	--------

一九三九	四〇年	八四、七〇二
------	-----	--------

一九四〇—一年 八四、八五三

文治費は戦前迄主として労働黨の主張する社會政策により従小の増加を示して來たが開戦年度以降は増勢が停止したと云つてよい。而かもこの間癩疾年金等の増額があり、一九四〇—一年には小麥不作による農民救済のために二百七十七萬ポンドの小麥資金等が計上されたが、これらは主として節約によつて補填された。

而して文治費は大勢としてさしたる増加を示してゐないのであるから經費の急激なる膨脹は主として國防費に基くこと云ふ迄もない。近年に於ける國防費の趨勢を示せば次の如くである。(單位千圓。尙前大戰の經費の殘存たる世界大戰費(國債利拂及び償還費、年金等)が普通歳入から年々千八百乃至千九百萬ポンド程度支出されて居るがこれは國防費中に入らない。)

年	國防費	内普通歳入から	公債から
一九三六—七年	八〇六〇	八〇三八	三三
一九三七—八年	九七七三	七八〇七	一九六六
一九三八—九年	一七〇〇五	一六〇八三	一九一二
一九三九—四〇年	五五二〇〇	二四七五三	(外債) 三六、四四七
一九四〇—一年	一八六〇〇〇	六五〇〇〇	(外債) 一二一、〇〇〇 (外債) 四三、〇〇〇

オーストラリア再軍備計畫開始前の一九三六—七年に比すれば、來た戦争が勃發した以前の一九三八—九年に於てさへ國防費は既に二倍にたつてゐる。國防費の普通歳入及び經費總額に對する割合を示せば次の如くである。

年	對普通歳入	對經費總額
一九三六—七年	一〇%	九%
一九三七—八年	一一%	一〇%

一九三八―九年 一七
 一九三九―四〇年 五〇
 一九四〇―一年 一三〇
 六八

国防費内譯を一九三七―八年及び一九三八―九年につき列擧すれば次の如くである。(當時未だ陸海空の三省に分れずたゞ國防省のみが存在してゐた。(單位千ポンド)

陸軍	二、九六〇	四、四九七
海軍	二、一八一	四、三八三
空軍	一、九二九	二、八一六
民間航空	二四七	(註)
軍需局	七二七	一、二五九
小銃クラブ	六五	六六
中央行政費	三三	五三
一九三七―八年	一九三八―九年	

主要軍需官委員會 五 四二三

特別費

兵器彈藥飛行機其他	一、二八九	一、六六三
國防工事	三〇	一、〇〇六
民間航空助成	一六九	(註)
計	九、七七三	一七、〇〇五

(民間航空省設立のため國防省豫算から分離。)

今次戰爭開始以來の國防費計彙を見るに一九三九年五月豫算では一九四〇年六月迄の國防費は三千三百萬ポンドであつたが、それが同年十一月の予算では六千百萬ポンド、一九四〇年一月には七千百萬ポンドと見積られたが、實際にはこれを消化し得ず五千五百萬ポンドに留まつた。一九四〇年五月の一九四〇―一年度予算に於ては國防費は七千九百萬ポンド、内普通歳入からの支出三千四百萬ポンド、公債收

入からの支出四千五百萬ポンドと見積られてゐたが同年十一月の予算ではこれが一億八千六百萬ポンドに達したことは既掲の如くである。月別國防費は一九四〇年初頭には三百萬ポンド程度であつたが、同年五月には六百萬ポンド、十月には千二百二十萬ポンドに増加した。一九四一年六月には更に千五百萬ポンドに増加するであらうと見られてゐる。

一九三七年迄は國債は漸増の傾向あつたが一九三七―八年に再軍備が開始されて以降再び増勢に轉じた。各年六月三十日の國債總額次の如し。(單位百萬ポンド)

年	總額	内外債
一九三五年	三九四	一七三
一九三六年	三九一	一七二
一九三七年	三八六	一七一
一九三八年	三九〇	一七四

一九三九年 三九七 一七八
 一九四〇年 四五三 一八八

一九三九年六月三十一日に於ける國債一人當り額は五七ポンド一シリング五ペンスであつた。

オーストラリアの國民所得總額は一九三八―九年には七億八千八百萬ポンド、一九三九―四〇年は八億六千三百萬ポンドで一年間に九パーセントの増加を示し、一人當り所得はそれ約百十五ポンド、百二十二ポンドとなつてその富裕さを示して居るが、國民所得に對する一九三九―四〇年及び一九四〇―一年戰時總算の普通歳入、總額總額及び國防費の割合を示せば次の如くである。(左の數字は極く大体を示す程度のものである。)

普通歳入	一九三八―九年	一九三九―四〇年
普通歳入	一二%	一一%
經費總額	一三	一七

國防費

二

六

又一九四〇―一年の國民所得を前年同額、或は十パーセント（前年は九パーセントの増加）増加するものとして、更に或は二十パーセント増加するものとして一九四〇―一年度予算普通歳入、経費總額、國防費の割合を示せば次の如くなる。

普通歳入	一七%	前年同額の場合	十%増加の場合	二十%増加の場合
経費總額	三二			
國防費	二〇			

オーストラリアの輸出入を見るに次の如くである。（千英ポンド）

輸入	一九三七―八年	一九三八―九年
商品	一一一、七三三	九九、三一三
貨幣地金	二、二四一	二、八四三
計	一一三、九七五	一〇二、一五六

輸出（括弧内は千英ポンド）

商品	一九三七―八年	一九三八―九年
	一一二、二八一	九七、〇三二
貨幣地金	(一四〇、六三二)	(一二一、五三三)
	一三、五五六	一五、一六八
	(一六三、四七)	(一八九、六三)
計	一二五、八三七	一一二、二〇〇
	(一五六、九七四)	(一四〇、四九六)

輸出

商品	一九三七―八年	一九三八―九年
	五四八	(二、二八〇)
貨幣地金	一一、三一四	一一、三二五
計	一一、八六二	一〇、〇四五

輸入品の重なるもの次の如し。（百萬英ポンド）

	一九三七―八年	一九三八―九年
茶	二・三	二・四
煙草	二・〇	一・八
綿織物	五・五	四・六
絹織物	一・三	一・〇
絹、人絹織物	三・三	二・六
袋類	一・五	一・五
石油	六・一	五・一
電機電線	三・五	三・六
農機機軸	一・四	一・二
金屬加工機軸	一・〇	一・三
動力機軸	三・七	二・四
鐵類	五・〇	三・〇
自動車及部品	七・七	六・七
ゴム及製品	一・七	一・五

木材	二・〇	一・四
印刷用紙	二・四	二・七
文具紙製品	一・九	一・九
醫藥品肥料	五・三	五・六
包装用品	二・五	二・三

輸出品については後に述べるから省略するが、羊毛、穀物、バター、肉、砂糖で全輸出額の五分の三、金及び貴金屬で五分の一を占めるといふ割合にかつて居る。

一九三八―九年に於ける方向別の輸出入を示せば次の如くである。

	輸入 (百萬英ポンド)	輸出 (百萬英ポンド)
イギリス	四〇	六八
屬領	一九	一八
諸外國	三九	五三

内、アメリカ 一四 一九
 計 一〇二 一四〇
 右の入出総次の如し。(百萬英ポンド)
 イギリス (出) 一四
 露領諸 (出) 五
 諸外國 (出) 〇・九
 内、アメリカ (出) 三
 計 一〇

商品だけの方向別入出超を見るに次の如し。(單位百萬英ポンド)

イギリス	(出) 一二・五	(出) 一二・八
露領	(出) 六・二	(出) 六・一
カナダ	(出) 二・三	(出) 一・三
インド	(出) 三・九	(出) 三・五
ニュージーランド		

その他 (出) 一・六 (出) 一・一
 大英帝國 (出) 九・一 (出) 〇・一
 外國 (出) 六・〇 (出) 九・三
 アメリカ (出) 一五・〇 (出) 一・七
 露印 (出) 六・三 (出) 六・二

一九三八―九年の實際地合の方向別出入次の如し。

輸入 (百萬英ポンド) 輸出 (百萬英ポンド)

イギリス	二・八	二・〇
大英帝國	一・六	二・九
内、ニュー・ギニア		
諸外國		一五・九
内、アメリカ		一五・九
計	二・八	一八・九

(英ポンド三・五) (英ポンド一五・一)

商品及び貨幣の合計入出額に於てオーストラリアは次の如き傾向を示して居る。(單位百萬英ポンド)

一九二九―三〇年	(入) 六・一
一九三〇―一一年	(出) 二八・五
一九三一―二年	(出) 四一・一
一九三二―三年	(出) 三八・八
一九三三―四年	(出) 三八・三
一九三四―五年	(出) 一六・五
一九三五―六年	(出) 二五・二
一九三六―七年	(出) 三七・〇
一九三七―八年	(出) 一一・八
一九三八―九年	(出) 一〇・〇

一九三八―九年の輸出入がともに減少すると共に貿易收支も右の如く悪してゐるが、これは貿易量の減退を云ふよりもむしろ輸出價格

の低落に原因するものであり、オーストラリアの如く國內景気が多分に盛出の如何に依存する國に於ては輸出價格は國內經濟動向觀察の上極めて重要であるが近年に於ける聯邦統計局の輸出價格指數は次の如くである。

一九二八年	一〇〇
一九三〇年	六四〇
一九三一年	五六四
一九三二年	五六六
一九三三年	六一六
一九三四年	六五三
一九三五年	六五六
一九三六年	八〇五
一九三七年	九二四
一九三八年	六九九

一九三九年 六七六

右の中一九三九年は四・五月の六三〇を最低としてそれ以後漸降し十一月には七六九まで上昇して居る。

かくて一九二九―三〇年迄入超を続け一九三一―二年に最好調を示したオーストラリアの輸出入バランスが近年再び悪化した結果、オーストラリアのロンドン資金は一九三七年六月の一億百萬ポンドから一九三八年六月には七千八百萬ポンド、一九三九には五千五百萬ポンドに落ちた。一九三九―四〇年には輸出が一億六千八百萬ポンド、輸入が一億四千五百萬ポンドに達し、二千三百萬ポンドの出超を示したがこれは海外子配當支拂額に五百萬ポンド程不足した。併し一九四〇年にはアメリカ株式の若干の動員及び政府外債發行等によりロンドン資金は若干増加したものと見られて居る。

四、工業

オーストラリアは農村人口よりも都市人口が多いがその生産額から見ても立派な工業国である。オーストラリアの工業は世界大戦後本格的發展を遂げたのであるが、一九二八―九一年から一九三七年に至る十ヶ年間の各産業部門の生産及び輸出を示せば次の如くである。(單位百萬ポンド)

産業	生産價格 (註)		輸出額	%		生産價格に對する輸出の割合
	一九二八	一九三九		一九二八	一九三九	
農産	七八六	二〇・四七	二九五	二五・七一	三七・六一	
牧畜	八六四	二二・五一	五九四	六八・六八	六八・七五	
乳産	四六四	一一・〇八	一〇八	九・〇五	二三・三〇	
鑛産	二〇二	五・二七	一三四	一一・二五	六六・五三	
林産	一〇六	二・七六	一二	一・〇八	一一・二一	
小原産計	二、四二四	六三・〇九	一、一五六	九三・七六	四七・二八	

丁糖	一、四一八	三六・九一	五〇	三・五八
合計	三八四二	一〇〇・〇〇	一、一九六一〇〇・〇〇	三一・一五

(註) 生産額より調整せる原料及び燃料を差引いたもの以下同じ。
 原始産額合計に比すれば第二次産額の生産価格は未だ遠く及ばないが各産額部門間には第二次産額が歴史的優勢を示して居る。併し、オーストラリアの工糖は未だ國內市場向けのもので右表に明らかな如く輸出額及び生産価格に對する輸出額の割合は極めて小さい。併し工糖の輸出も次の如く増加して居る。(單位百萬圓。一九一三年一〇〇%)

	一九三七—八年	%	一九三八—九年	%
農産	三九	三七三	二六	二四五
牧畜	六六	一五一	五九	一四二
乳糖	一二	三三五	一四	三八九

礦産	二四四	一一二	二二	一〇九
漁業	〇・三	九一	〇・二	六八
林業	一・三	一一一	一・〇	九五
原始産計	一四五	一八一	一二五	一五七
工業	八	三六八	八・六	三七五
合計	一五三	一八七	一三四	一六三

一九一三年に約二百三十萬ポンドであつた工業輸出は一九三八—九年には約三・七倍とかり、陸産製品輸出となり陸産製品輸出を除けば増大のテンポが最も大きく且つ他の産額部門はいづれも(同様陸産を除き)一九三八—九年に於て前年より減少を示して居るが丁糖製品は常に絶えざる増大を示して居る。
 工業製品輸出の増大を裏づけるものとして生産額類及び生産高も顯著な増大を示してゐる(單位百萬ポンド)

年	生産価額	生産高
一九一一年	五一	一三三
一九二一年	一一一	三二〇
一九三一年	一一〇	二八一
一九三五年	一六二	四一四
一九三六年	一七七	四五一
一九三七年	一九六	四九八

又工場数及び労働者数も次の如く増加を示してゐる

年	工場数	労働者
一九一一年	一四、四五五	三一、七一〇
一九二一年	一八、〇二三	三七、八、五四〇
一九三一年	二一、六五七	三三、六、六五八
一九三五年	二四、八九四	四九、二、七七一
一九三六年	二五、六六八	五二、三、九四八
一九三七年	二六、三九五	五五、九、一六〇

尙一九三八―九年の工場数は二萬六千九百で一九三一年より五千三百程多く、労働者数は五十六萬五千に達し恐慌前に於ける好況の絶頂たる一九二六―七年より十一萬三千の増加を示した。

右の如く近年に於ける工業は發達してゐるが工業内の各部門を見るに次の如くである。

(比較的規模小なる土石加工、窯業、貴金屬、寶石、樂器、光熱等の諸部門は省略す(單位百萬ポンド))

工業	一九三四年―五年	一九三七―八年
化學工業生産價額	九、〇三二	一一
生産高	二一、四四七	二八
工場数	五九六	六五二
労働者	一四、八四六	一八、八三五
冶金機械生産價額	三六、二〇四	六〇

食糧、煙草		製材		家具		製紙、印刷	
生産額	労働者	生産額	労働者	生産額	労働者	生産額	労働者
三二、三七三	一一九、五四二	七〇、五一七	六、四八八	二、七二五	六、〇六五	一一、三二〇	一九、五〇一
四、六五七	一五、二四〇	二、四四六	二、四一八	二、七二五	二、〇二〇	一一、三〇六	一一、三二〇
一五二	四、九八二	二、七七一	三、一一七	二、七二五	二、〇二〇	一一、三〇六	一一、三二〇
四〇	八、七八五	二、七七一	三、一一七	二、七二五	二、〇二〇	一一、三〇六	一一、三二〇
四〇	九	二、七七一	三、一一七	二、七二五	二、〇二〇	一一、三〇六	一一、三二〇
四〇	九	二、七七一	三、一一七	二、七二五	二、〇二〇	一一、三〇六	一一、三二〇

紡織業		皮革業		衣服業	
生産額	労働者	生産額	労働者	生産額	労働者
八五、六五〇	一二五、六四〇	二、八一〇	九、六六二	一三、〇七三	二八、八三九
六、一〇〇	八、二三二	二、八一〇	九、六六二	一三、〇七三	二八、八三九
一四〇	一七八、〇九二	二、八一〇	九、六六二	一三、〇七三	二八、八三九
七、一〇二	一〇	二、八一〇	九、六六二	一三、〇七三	二八、八三九
一〇	二七	二、八一〇	九、六六二	一三、〇七三	二八、八三九
一〇	二七	二、八一〇	九、六六二	一三、〇七三	二八、八三九
一〇	二七	二、八一〇	九、六六二	一三、〇七三	二八、八三九

3/

ゴム		計	
工場数	労働者	工場数	労働者
一、七五〇	一、七九〇	二四、二一一	二六、三九五
三四、〇一八	三九、〇六二	四四九、五九八	五五九、一六〇
二、四二六	二	二四、二一一	二六、三九五
六六、〇七九	七	二四、二一一	二六、三九五
二九二	三〇二	二四、二一一	二六、三九五
七、三六九	七、五三四	二四、二一一	二六、三九五
一四三、五二七	一九六	二四、二一一	二六、三九五
三六四、九一二	四九八	二四、二一一	二六、三九五
二四、二一一	二六、三九五	二四、二一一	二六、三九五
四四九、五九八	五五九、一六〇	二四、二一一	二六、三九五

右表に依つて明らか如くオーストラリアの工業は食糧その他の消費財生産を中心として發達しつつあるが、而かも各部門中金屬機械製造が最高位を占めてゐることは注目し得る。即ち對英援助の點から見れば工業中冷金機械が最も重要であるからである。

金屬機械製作部門中重要なるものを一覽すれば次の如くである。

(單位千ポンド)

一九三四—五年 一九三七—八年

一、農具

生産價額	一、〇三三	二、二一六
生産高	一、九八六	四、二二五
工場数	一三九	一六〇
労働者	四、二〇二	七、七五六

二、機械

生産價額	四、九一二	九、一四〇
生産高	九、一九三	一七、四三七
工場数	八八八	一、〇七六
労働者	一六、七一七	二六、二六一

三、鐵及び鋼

生産價額	五、六一四	九、〇六一
------	-------	-------

生産額	一九、一〇〇	二八、六八四
工場数	四三四	三六五
労働者	一五、六三四	二〇、一一七
四 非鉄金屬及び合金		
生産額	二、一一一	四、六六五
生産高	一二、一〇〇	二〇、六一三
工場数	三四	四二
労働者	三、二九二	五、三三〇
五 車		
生産額	五、九七三	七、七六九
生産高	一〇、二四八	一三、〇二九
工場数	一一一	一一六
労働者	二四、四八七	二七、二〇七
六 自働車及自働車組立		

生産価格	三、三五一	六、四一〇
生産高	四、八一八	一〇、〇〇九
工場数	二、五三九	三、〇九八
労働者	一三、七一一	二一、八五九
七 自働車車体製作		
生産額	二、六六四	三、九七〇
生産高	四、九〇七	八、三七一
生産量数	四五、四四五	九四、〇九一
工場数	一七七	二〇五
労働者	九、四二七	一二、七九五
八 電氣機械器具		
生産額	二、〇三七	三、二九一
生産高	三、八二二	六、四九四
工場数	二八〇	三五四

勞働者	七、〇九八	一一、〇五四
九 無線器具		
生産価額	六七三	一、二七四
生産高	一、八五九	三、二四七
工場敷	五六	七三
勞働者	三、三六〇	五、五一九
尙化學産業に就て付記すれば次の如くである。		
化學藥品		
生産価額	二、六三九	三、五三三
生産高	五、一七一	六、八七三
工場敷	二〇三	二二八
勞働者	四、二五一	五、二一〇
化學肥料		
生産価額	九八六	一、五五六

生産高	三、四四〇	四、九〇四
工場敷	三三	三二
勞働者	一、八〇一	二、四七四
近年に發達された主な工場としては飛行機々体、エンジン、プロペラ、スツク及び粗綿布、タイヤ布、アルミ板、皿、自轉車、電鏡、電氣用器具、工作機、萬年筆、化學藥品を製造する工場である。尙諸重要工場部門の輸出を見るに次の如くである。(單位千ポンド)		
一、總額	一九三七—八年	一九三八—九年
總額	一、一二六	一、〇一八
再輸出	二五一	二七二
内譯		
(イ) エンジン總額	一、三六	四、五
再輸出	二〇	〇・六
(ロ) 器具總額	一〇・七	

九 武器彈藥

(イ) 武器總額	再輸出	一〇	五
(ロ) 彈丸總額	再輸出	一	一九
(ハ) 藥總額	再輸出	一	四四
(ニ) 其の他總額	再輸出	八七	一〇五
	再輸出	一二	九

これらの輸出は英本國よりも主としてマレー、緬印、ニューギニア、フィリピン等に向けられるものであり、後述の如くこれらの諸國に對しオーストラリアが太平洋英屬領の工場たらんとする儘かながらの米を既に現けして居るものと云へる。

右の如きが今次戰爭勃發前に於けるオーストラリアの工業状態であ

る。而して上述に依つても明らかた如くオーストラリアの工業は既に戰前から急速な發展過程を示してゐたのであるが戰爭勃發直前及直後からはその發展の速度は二つの方面から促進された。一つは英國からの輸入の減少及び爲替節約のための輸入制限により國內用の工業製品の國內で製造せんとする氣運であり、他は英帝軍及濠洲軍によつて要求される軍需生産の増大である。

かくてオーストラリアは現在急激な工業發展期にあり、勞働者數について見るに一九三八―九年の總數五十六萬五千から一九三九―四〇年には八萬程激増して六十五萬に達し尙増勢を示してゐる。併し國內向け工業製品の製造と軍需生産は資本、物資及び勞力につき相剋關係にあるは云ふ迄もなく、この點で政府は投資統制令を布き軍需産業に優先的地位を與へてゐるが、民間では織布その他の平和産業に對しても多大の進出の熱意を示してゐるからこの方面でも或る程度の成績を擧げるものと見られる。

軍需生産については既に戦前二十ヶ所の鐵道工場にシャドール工場を設けなどして準備を進めてゐたが、戦後の發達は豫想の及ばなかつた程である。戦前にあつては武器彈藥製造に従事する労働者は僅かに二萬五千人に過ぎなかつたが、それが一九四〇年十月には二萬人増加し一九四一年七月には更に八萬人に増大させられる計畫で、この八萬人の労働者に資材を供給する労働者が七萬人を要すると云はれてゐる。又かゝる多大の軍需生産には多數の工作機械を必要とし、これが最大の難題とされてゐたが、その解決もアメリカからの輸入と自國生産の増大により著しく進み、國防産業に所要の機械を製造する工場の數は戦前の八から一九四〇年末迄には二十八に、其の他の工作機械、計器、ジクス及びフィクスチャーを製作する工場の數は八から八十五に増加した。

又大自動車工場を設けて自動車の自給を達成せんとする計畫もあるが、一九三六年オーストラリア政府によつて設立された聯邦飛行機

製作會社の生産能力は一九四〇年中頃から月産百臺に達し、造船設備も擴張されてイギリス海軍のために數十隻のスループ艦建造計畫を進め現在著々進水してゐる。

(註) 一九四〇年十二月自動車生産のため百五十萬ポンド支出

(註) 一九四〇年百萬ポンドで新飛行機工場設立。

百萬ポンドの資本でエンジン製作會社設立。

一九四一年中の飛行機工場竣工は八千乃至一萬と推定。

一方軍需省は一九四〇年十月には萬一の封鎖に備へてジュート麻、綿布、ゴム、鋤板、化學藥品、硃安、製皮原料及び染料等の工業原料一千萬ポンドの額(十二ヶ月分)程を安全ストックとして蓄積した。軍需省は戦前第一年度に於て二千萬ドルの軍需注文を發したが、一九四〇年七月に於ける軍需工場注文受高は總額五千萬ドルに達してゐたと云はれる。

今日オーストラリアはあらゆる種類の兵器彈藥を製造することが出

來、その大部分に於て自給自足の域に達したのみならず、小兵隊及び各種調役に於ては相當の輸出能力を有し近東方面の英軍に對し饒々供給してゐる。一九四〇年十月廿五日インドに催されたスエズ以來英帝國東方集團軍需會議は資源の融通により東方に於ける英帝國軍需の自給を最大限に迄擴張せんとするものであつたが、この計畫に於て最大の貢獻をなし得るものはインドとオーストラリアである。工業の一大發展を計畫して居る。蘇印等もオーストラリアから鐵や工作機械を輸入してオーストラリアの式に則り工場を建設する方針を進めて居る。かくてこの大戦を通じてオーストラリアはその工業力による對英援助を行ひ印度洋、太平洋方面の英艦隊の兵器廠となるのみならず、戦後（英國が倒れないと假定して）この方面の工場となり英本國の競争者たる路を歩んで居るものと云へる。

對英援助のため前大戦に於てオーストラリアが送つた三十萬の兵員の裝備は殆ど全部イギリスに於て製造されたものであるが、今次戦争

に於てはオーストラリアは自己の軍需を裝備した上に尙多大の軍需を英帝國軍のために供給し得る所迄達したのである。即ち前大戦に於てはオーストラリアの兵力的援助は専ら陸軍であつたのが、今次戦争に於ては若干の海軍の援助の外空軍援助に多大の重點が置かれて居ると恰も同じに、物資的援助に於ては前大戦に於ける如く原料的援助も尙極めて重大であるが、而も完成軍需品援助が特に重要視されて居ることを看過出来まい。とは云へ元來人口の少ないオーストラリアは例へこの戦争に於て極めて著大の工業的發展を示すとしても勞働力の點に於て絶對的制限があり、その工業の絶對的力番は勿論さして大規模なものとは成り得べくもなないことは云ふ迄もなない。併し此の際ではもはや失業者利用の余地は少ないとしても非重要産業（オーストラリアには所謂サーヴィス業に從事してゐる者の數が比較的多い）からの轉業随行や「國家安全法」及び一九四〇年中に行つた一般強制を繰によつて強制勞務動員を行へば尙比較的多數の勞働者を獲得ことが出来

る。これに認する者のため次に若干の資料を附記して置く。
 勢が可能と認められる年齢（十五―五十九才）に當る人員。
 （單位千名、一九三八年六月推定）

十四才以下	八八二	八五〇	一、七三三
十四―五十九才	二、二四八	二、一八一	四、四二九
六十才以上	三五六	三七四	七三〇
計	三、四八七	三、四〇五	六、八九三

職業別人口（單位千名）一九三三年國勢調査

漁業	一四	一	一四
長收産業	五二八	一九	五四七
林業	二六	一	二六
鑛業	六八	一	六八
計			

工業	三七五	一三六	五一
製造業	一〇七	一	一〇七
建築業	二一七	一	二一七
土木	二八	一	二九
其他	七二八	一三七	八六六
小計	二二二	二二	二二三
交通通信	三三八	一一二	四五二
商業金融	一二五	一〇七	二三二
官公吏自由業	二〇	三	二四
娯樂スポーツ	五二	一九〇	二四二
家事使用人	一二五	四六	一七二
其他	一二八	一五七	二八六
年金生活者	二、三六七	七八七	三、一五五
合計			

從價者
總計

九、九九九
三、三六七

二、四七四
三、二六二

三、四七四
六、六二九

五、原料及食糧

オーストラリアの對英援助は何と云つても食糧と動物性原料及若干の金銀等の原料である。これらのものは平和時でもその大半はイギリスに輸出されて居たもので戰時に於てはイギリスがこれを殆んど獨占的に利用し得るのである。先づかゝる點からオーストラリアの輸出を大體してかくに次の如くである。

	輸出(千ポンド)	(オーストラリア) 産出のものだけ)
動物性食糧	一九三七年—一九三八年	一九三八年—一九三九年
植物性食糧	二五、五九六	二七、二五一
動物性食糧	三九、一七四	二五、五九九
植物性食糧	五三、七七三	四七、三二八
動物原料	三、三〇九	二、六六九
鑽石		

金屬機械金屬製品

(A) 機械	一、一二六	一、〇一八
(B) 金屬其他	八、三九五	九、〇三九
計	九、五二一	一〇、〇五八
金銀地金貨幣	一六、九四七	一八、九六三
輸出合計	一五七、五八〇	一四〇、四九六

尙需戰當時イギリスは(一)羊毛、(二)肉、(三)バター、(四)チーズ、(五)卵、(六)砂糖、(七)鉛、(八)亜鉛、(九)鉛詰及乾菓、(十)小麥及小麥粉、(十一)大麥、(十二)皮革、(十三)林檎及梨につき購入契約を結んで居るがこれについては各品目毎に記すと、する。而してノルウェイ、デンマーク、オランダ、ベルギーのドイツ占領後は肉類、乳製品、卵等の輸入に努力して居るが船腹の關係で余りや分らないものと見られる。

一、牧畜

重要畜類總數(單位千頭、年度末)

年	馬	牛	羊	豚
一九三一年	一、七七五	一一、二六〇	一一〇、六一八	一、一六七
一九三二年	一、七六五	一一、七八三	一一二、九二六	一、一六二
一九三三年	一、七六三	一一、五一二	一一〇、九二一	一、〇四六
一九三四年	一、七六七	一一、〇四八	一一三、〇四六	一、一五八
一九三五年	一、七六四	一一、〇一一	一一〇、八七五	一、二九三
一九三六年	一、七六二	一一、四九一	一一〇、二四二	一、二〇二
一九三七年	一、七四六	一一、〇七八	一一三、三七二	一、一〇〇

馬は一九二〇年の二、四一五千頭を最高として以後減少し羊は大体に於て増加傾向を辿り牛及び豚は増減が甚しいが、從來最も多數を示した牛は一九三四年、豚は一九三五年である。

一人當り畜頭数
馬 牛 羊 豚

一九〇〇年	〇・四三	二・二九	一八・七五	〇・二五
一九一〇年	〇・三九	二・六五	二二・一六	〇・二三
一九二〇年	〇・四四	二・四九	一五・一一	〇・一四
一九三〇年	〇・二八	一・八一	一七・〇七	〇・一七
一九三五年	〇・二六	二・〇六	一六・一三	〇・一九
一九三六年	〇・二六	一・九八	一六・二〇	〇・一八
一九三七年	〇・二六	一・九一	一六・五九	〇・一六

何れも一人當り頭数は減少傾向を示して居る。

牧畜産品純輸出（輸入を差引く）

單位（一、〇〇〇）一九三六―七 一九三七―八年

生獸	牛	馬	羊	骨	膠類	グリセリン	毛	蹄	角	肉	冷東中肉
	頭	頭	頭	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg
	（一）	（一）	（一）	（一）	（一）	（一）	（一）	（一）	（一）	（一）	（一）
	〇・六	四	四九	一六	不明	（一）一、一六三	（一）一、一五二	不明	不明	不明	二、三三、八五一
	〇・一	三	一七	不明	不明	（一）一、〇二三	（一）一、八二〇	不明	不明	不明	二、九三、八〇二

グリセリン	(一)	三八	(一)	四一
毛	(一)	一二〇	(一)	一七七
蹄		不明		八
角		一九		二一
肉				
冷凍牛肉		三、〇三五		四、三六七
・ 羊肉		五、二三三		五、三三九
・ 猪肉		不明		一七二
・ 其他		三八五		四〇六
・ 其他	(一)	三九	(一)	二五
鱈肝		二九五		三九〇
其他		一〇		七
ソーセジ		六〇		一二五
皮革				

牛皮	九七六	九二九
羊皮	三、七八五	三、四三五
兔皮	一、六二三	一、〇三五
其他	一六五	二三八
獸脂	八一二	六一一
羊毛		
グリーズ	五四、九二一	四〇、五三一
スコアド	六、六五九	
トツブ	五三二	五、七三一
ノイル	一一二	
ウエイスト	三二	
合計	七八、四五八	六二、六五九

尙オーストラリア牧畜産品の生産額を示せば次の如くである。

市場販賣價額

	(單位千ポンド)	一九三六―七年	一九三七―八年
生産地價額(販賣コスト控除)		九五、四二九	九〇、五二四
純生産價額(生産コスト控除)		八七、四七六	八二、二〇一
一九三六―七年は生産價額に於て最高レコードを示した。		八四、四二一	七八、一六六

(一) 羊毛

オーストラリアは世界羊毛産額の約二十六%を産し世界の最大生産國である。その生産額は次の如くである。(單位一、〇〇〇)

年	量(ポンド)	價額(ポンド)
一九三三―三五年	一、〇一五、四二四	四〇、四四六
一九三五―三六年	九七一、〇五三	五五、一八六
一九三六―三七年	九八二、八三一	六三、五八五

一九三七―七八年	一、〇二三、三九〇	五四、一三一
一九三八―三九年(概算)	九八五、〇〇〇	四三、七〇〇

尙一九三九―四〇年は一九三八―三九年に比し若干増加して一、〇五〇、〇〇〇千ポンドの收獲を挙げたと概算されてゐる。オーストラリア羊毛の地元消費は極めて僅少で他は全部輸出に充てられる譯である。地元グリーズ消費次の如し。(單位千ポンド)

一九三三―三四年	六〇、八八一
一九三四―三五年	五五、七五三
一九三五―三六年	七〇、二〇五
一九三六―三七年	七一、五七九
一九三七―三八年	六八、三七七

戦時に於けるオーストラリア羊毛の輸出次の如し。

(1) 脂付羊毛(單位千セントアル)

	一九三七年	一九三八年
イギリス	二、九四四	二、三三二
フランス	一、二三八	一、六二〇
ベルギー	八七八	一、〇四一
日本	六九一	七〇三
ドイツ	一、二三八	一、六二〇
輸出総額	七、二一八	七、九五四
右償額(千ポンド)		
イギリス	一七、五三五	一五、九四九
フランス	六、三八三	六、八四六
ベルギー	四、三二五	四、二九八
日本	三、九八六	三、五九六
ドイツ	六、三八三	六、八四〇
移出総額	四一、二二一	三七、四〇八

() 作以外(單位千セント)

	一九三七年	一九三八年
イギリス	三〇九	三六五
カナダ	四六	四四
フランス	八二	九九
ベルギー	五一	五八
日本	六	一五
ドイツ	二七	一九
総額	六一六	七〇九
右償額(千ポンド)		
イギリス	二、七一二	二、五六三
カナダ	五四七	四二四
フランス	七二八	七二〇
ベルギー	四五七	四二一

日本	五七	一〇〇
ドイツ	三二二	一六七
約額	五、七六一	五、三二一

イギリスは羊毛輸入の大半を占めてゐるが他の大輸入國たるフランス、ベルギー、日本、ドイツ或ひはイタリア等は崩壊したか或は敵性國であるためイギリスは開戦後思ひのまゝに羊毛を獨占することが出来たが戦争開始前オーストラリア政府と輸出剰余を全部買付ける契約を結んだ。その内容次の如し。

- (イ) 実行期間。戦争終結中及終戦後一歳發期。
- (ロ) 價格は各品種共一ポンド英貨十シリング四分の三、この外イギリス外への轉賣利潤の半額を支持ふ。
- (ハ) 自給額、聯合國及中立國への販賣はイギリスの協定に於て行ふ。
- (ニ) 一定量をオーストラリアの地元消費のため保留する。
- (ホ) 買付價格は一年毎に協定する。

右の十シリング四分の三の價格は次のグリーンジー羊毛平均價格に比すれば有利であるが労働黨方面ではこれは事情が變つてゐるのであるから安價に過ぎると政府を攻撃した。

グリーンジー羊毛平均價格(單位シリング)

年	源 費	英 貨
一九三五―六年	一四・〇一	二一・七八
一九三六―七年	一六・四八	一三・一六
一九三七―八年	一二・五一	九・九九
一九三八―九年	一〇・三九	八・三〇

尙またイギリス政府は一九四〇年十月アメリカ政府との間にイギリス政府所有羊毛を二百五十万セントルだけアメリカに貯蔵し、且つアメリカの必要に應じてこれをアメリカに賣りつける契約を締結した。

(二) 肉 類
オーストラリアの畜類屠殺頭數次の如し。(單位千頭)

一九三五―六年 三、〇五七 一七、八九五 一、二九三
 一九三六―七年 三、四七六 一八、五三六 一、二〇二
 一九三七―八年 三、八二七 一九、三三九 一、一〇〇
 牛肉生産は一九三七―八年に一、三三六、八一三千ポンドと推定され
 たがこの内地元消費に一、〇三三、七六七千ポンド（約七十七%）が充
 てられ残り三〇三、〇四六千ポンドが冷凍、冷蔵又は罐詰等の形で輸出
 された。羊肉は一九三七―八年に七二八、七三〇千ポンド生産、この内
 五二三、八四八千ポンド（約七十二%）が地元で消費され残り二〇四、
 八八二ポンドが輸出された。肉類輸出次の如し。（括弧内は價額。單位
 はすべて一、〇〇〇）

	牛	羊	豚
一九三七―八年	三、〇五七	一七、八九五	一、二九三
一九三六―七年	三、四七六	一八、五三六	一、二〇二
一九三七―八年	三、八二七	一九、三三九	一、一〇〇
一九三七八年	三、三三六	八一三千ポンド	
一九三八年	七二八、七三〇千ポンド		
一九三九年	五二三、八四八千ポンド		
一九四〇年	二〇四、八八二ポンド		

年次	イギリス向ケ	全輸出	イギリス向	全輸出
一九三七―八年	一・八セントル	一六	二・六	一七
一九三七八年	(七)	(一一七)	(一〇)	(一一九)
一九三八年				五八九

皮革輸出次の如し。（括弧内は價額、單位はすべて一、〇〇〇）

八八二ポンドが輸出された。肉類輸出次の如し。(括弧内は價額。單位はすべて一、〇〇〇)

	一九三七—八年		一九三八年—九年	
	イギリス向ケ 全輸出	イギリス向 全輸出	イギリス向 全輸出	イギリス向 全輸出
ベーコン・ハム	一・八センチタル (七)	一六 (一一七)	二・六 (一〇)	一七 (一一九)
冷蔵牛肉	五八四 (九六七)	五八六 (九七二)	五八七 (九八二)	五八九 (九八八)
其他牛肉	二、一三八 (三、〇六〇)	二、三五一 (三、五九四)	一、八八九 (三、九一九)	二、一三〇 (三、三三五)
豚肉	三三三 (九一一)	三三九 (九三四)	三〇一 (八五九)	三〇七 (八八二)
鶏肉	二、七〇六對 (一五三)	二、九七三 (一七二)	三、六七二對 (二一一)	三、九九四 (二三二)
蹄	九二センチタル (九二五)	一二三 (三九九)	一一六センチタル (三九一)	一四八 (五〇一)
ソーセジ	八 (九六七)	二七 (三九)	七 (三九)	二二 (三九)
羊肉	一、九六七 (五、二二五)	二、〇一八 (五、三三九)	一、八一〇 (四、六八二)	一、八六四 (四、八〇七)
その他	(一四三) (三九八)	(四五一) (四七一)	(一四七) (三六六)	(四四八) (四四五)

右の如く大部分はイギリスに輸出されてゐるが且例外としてソーセジだけは對米輸出が多い。(一九三七—八年は一七千センチタル、二七八千ポンド、一九三八—九年は一二千センチタル、二五九千ポンド)
イギリス政府は一九三九年十月から一九四〇年九月迄の間に二十四万トン以上の肉類を賣付けける契約を結んだ。

(三) 皮革

皮革輸出次の如し。(括弧内は價額、單位はすべて一、〇〇〇)

	一九三七―八年	一九三八―九年
牛馬皮	イギリス向ケ 全輸出 五五九枚 (五三一)	イギリス向ケ 全輸出 五八〇枚 (四〇九)
羊皮	二、八五二 (七〇五)	一三、六一九 (三、四五六)
兔皮	八センチタル 五〇センチタル	一センチタル 四四センチタル
その他	(一九六) 一、〇一三 (一三六)	(一五) 一八五 (三〇) (二四八)

皮革は對米輸出が盛んでイギリスに輸出した残りは大部分アメリカに輸出されて居た。尙皮革に就いては國內製革業者が一定の統制借段で國內所要の皮革を買ひその剩餘を國內業者と輸出業者が自由競争で買付け

又統制信段で買ったものは輸出出来ない事に開戦後定められた。

二、酪農及び養鳥

(一) 乳製品

酪農業はオーストラリアに於て近年最も發達の著しい部門である。その發展の指標を見るに次の如くである。而して従業者數の増加率の低いのも注目に價する。

乳牛頭數千頭	バター生産千ポンド	従業者數千人
一九一六―一七年	一、七四七	一八二、四七〇
一九二六―一七年	二、四三四	二五三、二六〇
一九三六―一七年	三、三四三	三九六、二六一
一九三七―一八年	三、三六八	四三〇、二六一

乳産額は次の如くである。

乳牛(年平均)數 千頭	牛乳生産		一頭當り生産 ガロン
	千ガロン	ガロン	
一九三三―一四年	三、〇五〇	一、一四五	三七五
一九三四―一五年	三、一七五	一、一八四	三七三
一九三五―一六年	三、二六六	一、一三七	三四八
一九三六―一七年	三、二四九	一、〇七九	三三二
一九三七―一八年	三、二一〇	一、一五六	三六〇

一九三七―一八年に於ける牛乳使用次の如し。

バター生産用	九〇二、五七〇千ガロン
チーズ生産用	五五、七三一
コンデンス・ミルク	三五、九三九(註)
その他用	一六二、六八六
牛乳生産高	一一、一五六、九二七

(註)はニュー・サウス・ウェールズ及びヴィクトリアのみ

近年に於けるバター、チーズの生産額は次の如くである。(千ポンド)

	バター	チーズ
一九三三—三四年	四五〇、九三六	三八、四七六
一九三三—三五年	四六九、〇七八	三九、九七五
一九三五—三六年	四三三、七二二	三八、五九八
一九三六—三七年	三九六、二六一	四四、七二八
一九三七—三八年	四三〇、二六一	五六、六〇六

右の外コンデンス、ミルク及粉乳生産も急速な發展を遂げてゐる。主産地ヴィクトリア州の生産高を見るに一九三四—三五年四一、八九九千ポンド、一九三五—三六年五一、三九〇千ポンド、一九三六—三七年五三、一五九千ポンド、一九三七—三八年五七、六三二千ポンド、他の州の数字は明瞭でないが、一九三七—三八年に於ける全オーストラリア産額は七七、五五五千ポンドに達して居ると云はれる。

國內に於けるバター及チーズの消費量は次の如し

年	全消費量	一人當り	全消費量	一人當り
一九三三—三四年	二〇六、六三〇千磅	二九、二二〇	四・三	磅
一九三四—三五年	二〇六、五六一	三〇・八	二二、二二〇	磅
一九三五—三六年	二二一、〇八〇	三二・七	二五、七一四	磅
一九三六—三七年	二二一、九六四	三二・六	三〇、九三五	磅
一九三七—三八年	二三二、九一七	三三・九	二九、四八七	磅

バター、チーズの輸出次の如し(括弧内は償額)

年	イギリス向け	全輸出	イギリス向け	全輸出
一九三七年—三八年	一、六〇六千磅	(一〇、九七三)	二、一七〇千磅	(二、二九五)
一九三八年—三九年	一、九七三千磅	(二〇、七八一)	二、一七〇千磅	(二、八九二)
一九三九年—四〇年	二、一七〇千磅	(二〇、七八一)	二、一七〇千磅	(二、八九二)
一九四〇年—四一年	二、一七〇千磅	(二〇、七八一)	二、一七〇千磅	(二、八九二)

イギリスの購入契約は一九三九年九月から一九四〇年六月迄にバター
 七五、五〇〇トン、チーズ一三、〇〇〇トン即ち一年にそれぞれ九四、
 五〇〇トン及び一六、五〇〇トンに當る。一ハンドレットウエイトの價
 格は次の如し。

	バター	チーズ
特選品	一三七シリングニペンス二五	七六シリング六ペンス七五
一級品	一三五、七、二五	
二級品	一三一、一、七五	七四、〇、七五ペンス
下級品	一二七、六	七一、六、七五

(二)卵

主要養鳥急次の如し。(單位千頭)

一九一三年 一九三七、八年

家鴨	一〇、八三八	一五、三五九
鴉鳥	七七六	六三二
七面鳥	一二七	九七
	四五〇	四二〇

生産額次の如し。(千ポンド)

年	飼養頭数	生産地便額	純生産額
一九三五、六年	九、五七五	八、七一八	五、六六八
一九三六、七年	一〇、六五三	九、六六八	五、六八一
一九三七、八年	一一、八七八	一〇、七匹匹	六、四五六

對外純輸出(括弧内は便額)

一九三六年、七年	一九三七年、八年
生鳥 (一) 一、六八一頭	二、一三六頭
(二) 六八四磅	七七九磅

冷凍肉

(三四、八一六磅) (三六、六五三磅)

卵 一六、四六六千ダース 一一、二七八千ダース

(九五四千磅) (六八六千磅)

卵製品 六二〇千ダース 三九四千ダース

(一五千磅) (一三千磅)

對英卵輸出

イギリス向け

全輸出

一九三七―八年 一一、二一五千ダース 一一、二八七千ダース

(六八〇千磅) (六八六千磅)

一九三八―九年 一〇、〇六九千ダース 一〇、一四四

(六三一千磅) (六三八)

イギリスの卵買付は一ケ年毎に契約される。買付量は最低年九百万ダースとして、産腹の許す限り輸出の全量に及ぶこととして、優待は十四ポンド箱九シリング十ペンス八三であつた。

三、畜業

オーストラリアの農耕面積は一九三〇―一年の二五、一六三エーカーを最高として近年の世界農産物過剰の結果減少を來してゐるが、一九三六―七年以降は若干の増加を示してゐる。

一九三四―五年 二〇、四二八千エーカー

一九三五―六年 一九、九七四

一九三六―七年 二〇、六〇二

一九三七―八年 二一、九五一

一九三七―八年に於ける主要農作物耕作地面積を示せば次の如である。

	千エーカー	%
小麥	一三、七三四	六二・五七
燕麥	一、四〇八	一・四六
玉蜀黍	三二〇	一・六三
大麥	六二五	二・八五
豆類	四〇	
ライ麥	一二	
其他穀物	二四	
乾草	二、九八二	一三・五八
新草	一、六三九	七・四七
草其他	二九	
果樹	二七七	一・二六
葡萄	一二五	〇・六五
蔬菜	三三	

甘蔗	三五七	一・六三
馬鈴薯	一一四	〇・五
玉葱	八	
その他球根類	二七	
煙草	一〇	
繭	四	
パンプキン及メロン	三二	
ホップ	一	
棉	五二	(註)
その他	八八	一・六五

(註) 掲記以外全部を含む。
一九三六―一七七年及び一九三七―一八八年の生産品及び生産額は次の如くである。

品名	生産量 (千トン)			生産額 (千円)
	一九三六年	一九三七年	一九三八年	
大麦	六	一〇	一〇	二、三二六
玉蜀黍	七	六	一、七五八	一、七六一
燕麥	一六	一七	二、二八二	二、五三七
米	二	二	四、五八	四、五九
小麦	一三一	一八七	四〇、四七一	三、七〇〇
乾草	三十三	三十三	一三、六二九	一三、六二九
豆類	〇、七	〇、六	二、五八	二、二二
玉葱	〇、〇五	〇、〇五	二、五〇	二、五五
馬鈴薯	〇、四	〇、三	二、一六五	二、四四二
糖	二〇、四	二〇、五	四、二三三	四、八六五
葡萄酒	二〇、四	二〇、四	四、二三三	四、八六五
乾葡萄酒	二〇、四	二〇、四	四、二三三	四、八六五
葡萄酒	二〇、四	二〇、四	四、二三三	四、八六五
ホップ	二、三	二、二	一、七一	一九〇
砂	〇、七	〇、八	八、七三二	九、〇六五

品名	一九三六年	一九三七年	一九三八年
棉花	一九	一一	三三〇
烟草	五一	五九	四三七
果實			八、五〇九
綠草			二、七八四

項目	一九三六年		一九三七年	
	生産地	純生産	生産地	純生産
販賣價額	九一、二九六	九三、一一二	九一、二九六	九三、一一二
生産地價額	七九、〇二五	七八、九二三	七九、〇二五	七八、九二三
純生産價額	六三、一一三	五八、八四〇	六三、一一三	五八、八四〇

小麥耕作は近年ストックの増加と價格の低落によつて常に困難を續け政府の補助金を付けてゐる状態であり、開戦後は極力これをイギリスに向け買らんとしてゐるが、カナタ等イギリスに近距離の生産地の競争が

あり又船舶不足のため充分その目的を達してゐない。
近年に於ける小麥耕作面積及生産量次の如し

年	耕作面積	生産量
一九三五―六年	一一、九五六千エーカー	一四四、二一七千ブツシエル
一九三六―七年	一二、三一六	一五一、三八九
一九三七―八年	一三、七三四	一八七、二五五
一九三八―九年	一四、二二四	一五四、四二七
一九三五―六年迄小麥生産が衰退してゐたがこの年を轉期に再び上昇に轉じた。一九三八―九年は早害のため約九千万ブツシエル程度の收穫しかなく、從來のストツクが歸戦後イギリスに引取られた後を受けて耕作者の狀態の幾分好轉が期待されてゐたにも拘らず、政府は特別の補助金でこれを救済せねばならなかつた。オーストラリアの一エーカー當り收穫量は一九三六―七年一二・二九ブツシエル、一九三七―八年一三・六三ブツシエル、一九三八―九年一〇・八六ブツシエルでその一エーカー		

一當り收穫量は世界でも殆んど最低位に近い。だからこの點勿論改良の余地があり其の他施肥耕作方法の改良により天候の條件に對しても抵抗力を増すことが出来るといはれてゐる。而かもオーストラリアでは牧畜のため特に牧草を栽培してゐるがこれを小麥畑に轉換することも極めて容易で小麥の收穫は實行さへすれば多大の余力がある。
又生産量は他面小麥價格に依存するがオーストラリアの一ブツシエル當り小麥平均價格の變化は次の如くである。

年	五シリングーペンズ	二五
一九二八年	五	四五
一九三一年	二	四五
一九三二年	三	五
一九三三年	二	九五
一九三四年	二	五
一九三五年	三	七五
一九三六年	四	七五

一九三七年 五〇・五
 一九三八年 三・四・七五

國內小麥消費は次の如くである。(一九三三―三四年から一九三七―八年迄の五ヶ年間の平均)

食糧

製粉量 一、二七六、九三六トン
 粉輸出 六一〇、五〇八トン
 ビスケツトとしての 一、一〇七トン
 純輸出 六六五、三二一
 國內消費 二、八六四
 糲ストツクの變化 (一) 六六二、四五七
 純消費 三、七九七、九三六ブツシエル
 右小麥換算 一九六ポンド
 一人當り消費量として

同左 小麥換算

種子

四・七ブツシエル

種子 一三、八三一、二三四ブツシエル
 一人當り量小麥 二・〇五ブツシエル
 粉に換算 五九ポンド

この外飼糧として悉らく千五百万程用ひられたから全体の國內消費は約七千万ブツシエル程度となる。收穫量からこの七千万ブツシエルを除いたものが輸出可能量である。
 小麥及小麥粉輸出は次の如くである。(單位千ブツシエル)

年	小麥	小麥粉	計
一九三五―六年	七六、九九三	二九、六一九	一〇六、六一三
一九三六―七年	七、七七八	二七、一〇九	九八、八八七
一九三七―八年	九、四三〇	三〇、二六二	一、二四、七六六
一九三八―九年	六三、三五二	三、四八三	九八、一八三
(暫定)			

(註)右の小麥粉は小麥に換算。又計は大體純輸出とみて差支へない。オーストラリアの小麥は世界産額約三・五三%（一九三二—六六年平均、以下この所同じ）で第九位であるが、小麥輸出（小麥粉を含む）に於ては十九%八八を占めカナガ及アルゼンチンに次いで世界第三位である。

小麥の輸出は主としてイギリスに向けられるが小麥粉の輸出先は動搖甚だしく一定してゐない。だ、蘭印は比較的一定し又多量に輸入するが、一九三八—九年に於て一、九三〇千セシタルが輸出された。而して小麥粉の輸出先としては南阿、ホンコン、マレ、フィリッピン、支那等でおーストラリアは相當大なる程度に於て大平洋及印度洋の補充製粉工場たる役割を努めてゐるのである。小麥及小麥粉の對英輸出次の如し。（刮内は價格）

	一九三七—八年	一九三八—九年
小麥	イギリス向け 全輸出 三六九千セシタル (二、三六〇〇)	イギリス向け 全輸出 一九三、四〇〇千セシタル (四、四四三)
小麥粉	三、七五八 (一、七四二)	二、三七九 (七〇五)
小麥	イギリス向け 全輸出 五六七、〇〇〇千セシタル (二、三六〇〇)	イギリス向け 全輸出 三、七五八 (一、七四二)
小麥粉	一、二六〇九 (六、〇三三)	一、四五〇一 (四、五四〇)

戦争が勃發するやオーストラリアは二千万蒲ツシエルの小麥買付けをイギリスに交渉したが約七百五十萬蒲ツシエル及小麥粉五万トンの契約しか出来なかつた。一九四〇年に於ては小麥百五十万トン、小麥粉十五万トンの買付契約が出来た。尙オーストラリアは一九四〇年度收穫小麥はこれをすべて政府が買上げ、聯邦小麥局を通じてその貯蔵販賣に自ら當つてゐる。

(二)大麥

大麥の作付面積及收穫次の如し。

年	面積	收穫
一九三五―六年	五六四エーカー	九、六二四千ブツシエル
一九三六―七年	四七〇	七、三三六
一九三七―八年	六二五	一一、五三四

(註)一九三七―八年は推定)

大麥の輸出は次の如し。

年	イギリス向け	全輸出
一九三七―八年	一、九八四千セントル	一、三〇二千セントル
一九三八―九年	(六五七千磅)	(八〇五千ポンド)
	一、〇二七	一、三〇九
	(二七八)	(三四一)

大麥も聯邦大麥局がすべて買ひ上げこれを貯蔵販賣の任に當つてゐる。

(三) 燕麥及玉蜀黍
 燕麥及玉蜀黍の生産輸出は次の如し(括弧内價格)

年	生産	純輸出
一九三五―六年	一八、七二〇千ブツシエル	二四〇千ブツシエル
一九三六―七年	一六、六六二	(二七千磅)
一九三七―八年	一七、一六五	(三四)
		二二九
		(三五)

年	生産	純輸出
一九三五―六年	七、四六七千ブツシエル	(四七、〇八二千ブツシエル)
		(一二千磅)

一九三六―七年	七、二四六	(一) 六、八〇四
一九三七―八年	六、八一六	(一) 一
		(一) 四七、三八八
		(一) 八

(四) 砂糖

甘蔗栽培面積（一九三七―八年に四千エーカー程度のビート作付面積があつたがこれは近年漸減しつつあり、省略する）及生産額は次の如くである。

年	面積 千エーカー	甘蔗生産額 千トン	砂糖生産額 千トン
一九三五―六年	三三四	四、五〇〇	六四六
一九三六―七年	三五九	五、四四五	七八二
一九三七―八年	三五八	五、四九四	八一〇

砂糖は全生産額の四八％（一九三五―六年）、五四％（一九三六―七年）五五％（一九三七―八年）が輸出されその率は上昇して居り、大部分は次の如くイギリスに輸出される。

イギリス向	一九三七―八年	一九三八―九年
	三五九千トン	四二八千トン
全輸出	(三、三二五千磅)	(四、〇二六千磅)
	三九一千トン	四四三千トン
	(三、六八五千磅)	(四、一七七千磅)

一九四〇年度には一九三九年生産の全余剰をイギリスに賣る契約が締結直後に出来た。
この契約に依れば従来より對英輸出が七万九千五百トン増加すると推定されて居た。

(五) 果實

主要果實の作付面積、收穫次の如し。(單位面積千エーカー、收穫千
 プツシエル、價額千ポンド)

葡萄 一九三五年 一九三六年 一九三七年 一九三八年

面積	收穫	價額	林檎			
			面積	收穫	價額	面積
一一八	一一三	一一三	一〇二	一〇三	一〇〇	一〇〇
九、七七一	一〇、九九八	一〇、九九八	九、七七一	一〇、九九八	一〇、九九八	一〇、九九八
二、五〇〇	二、七九四	二、七九四	二、五〇〇	二、七九四	二、七九四	二、七九四
四七	四八	四七	四七	四八	四七	四七
五、〇五七	四、九七一	五、一〇六	五、〇五七	四、九七一	五、一〇六	五、一〇六

面積	收穫	價額	バナナ			
			面積	收穫	價額	面積
一一八	一一三	一一三	一一八	一一三	一一三	一一三
九、七七一	一〇、九九八	一〇、九九八	九、七七一	一〇、九九八	一〇、九九八	一〇、九九八
二、五〇〇	二、七九四	二、七九四	二、五〇〇	二、七九四	二、七九四	二、七九四
四七	四八	四七	四七	四八	四七	四七
五、〇五七	四、九七一	五、一〇六	五、〇五七	四、九七一	五、一〇六	五、一〇六

面湯 一五 一五 一四
 乾燥 九〇五 一、一一五 一、〇七七
 便糞 二六八 三三三 三三三
 果實の輸出次の如し。(括弧内は便糞・単位・量は千セントアル・便糞千ポンド)
 一九三七 三八年 — 一九三八年 — 三九年

	イギリス向の	全輸出	イギリス向け	全輸出
乾草	九八八	一、四〇五	一、〇四七	一、六四四
其他乾草	(一八八〇)	(二五五〇)	(一七五七)	(二七四二)
其他乾果	三七	五三	二五	三九
生果	(五六)	(一四四)	(七六)	(一一七)
	一、八八五	二、五五六	二、〇一三	二、七五三
	(一四二四)	(二〇五五)	(一四〇〇)	(二〇二二)
糖	七四二	八六五	六九三	八一四
	(一〇六八)	(一三八八)	(一〇六一)	(一三七一)

糖及び乾果についてはイギリスとの間に輸入契約が締結されたが
 砂糖及び糖等生果としてイギリスに輸出されてゐたものはイギリスの
 消費節制のために大打撃を蒙り聯邦政府は一九四〇年の全收穫を買上
 げ糖増産を救済することゝなつた。

四・林 業

オーストラリアの森林面積は千九百五十萬エーカーで全面積の約一
 %〇二に當り人口一人當り面積は三エーカー一九に當る。普通一人當
 り森林面積が〇・八六エーカー以下の國は木材を輸入する必要がある
 と云はれるが、オーストラリアは例年二千八百萬立方フィートの木材
 入産を齎して居る。これは右山林面積が十分利用されてゐないことを
 意味すると共にオーストラリアの山林はその九十%迄が便質の木材
 を産し、従つてパルプ用材その他多量の軟質木材を輸入せねばならぬ
 ことに原因するものである。併し便質木材に關しては於多量の輸出

もめる。

一九三七年一八年に於けるオーストラリアの元太（切出）高は燧燧材九億六千一百萬立方呎、燧燧材二億三千六百萬立方呎、合計十一億九千七百萬立方呎で材木生産高は七億四千六百萬立方呎である。尙オーストラリアの木材輸出は次の如し。

(單位百萬立方呎、括弧内は價額、單位千磅)

年	イギリス向け	全輸出	年	イギリス向け	全輸出
一九三七	—	五二	一九三八	—	三二
一九三七	(一六)	(五二八)	一九三八	(一四)	(三三七)
一九三七	一七	四九	一九三八	一一	四四
一九三七	(四七)	(一三七)	一九三八	(二五)	(三九四)

木材の對英輸出は余り多くなく、輸出先はニュージーランドを始めとする太平洋・印度洋・英領領が中心である。

五、鐵 業

一九三七年に於けるオーストラリアの鐵産額は次の如し。
(單位はイギリス一・〇〇〇)

品名	單位	生産量	生産額
アンチモニー	(トン)	一・〇	一七
鐵 業	(トン)	三・三	九一
アスベスト	(ウエイト)	五・九	一一
酸化鐵	(トン)	三・一	六・六
錳	(ハンドレト)	〇・一七	三・六
錳	(ウエイト)	三・三九三	三二五
石 炭	(トン)	一二・〇七四	七・三三六
銅	(トン)	二一	一六三
ダイヤモンド			〇・二

珪藻土 (トン)	三	六
寶石		一・四
金 (オンス)	一、三八一	一、九九三
石 膏 (トン)	一五五	一一一
鐵 礫 石 (トン)	一、八七一	二、一四九
陶 土 (トン)	一六	一四
鉛 (トン)	四七	一、一〇〇
銀 鉛 (トン)	二八七	四、三一四
石灰石 (トン)	四九一	一三三
マグネサイト (トン)	一九	三七
マンガネズ (トン)	一	五・五
モリブデン (トン)	一	一〇
イスマリヂウム (オンス)	〇・五	一五
燐 石		九

燐 礫 石 (トン)	〇・〇七	〇・〇七
ピグメント (トン)	〇・七	一・三
ブラマナ (オンス)	〇・〇四	〇・四
錳 (トン)	七三	一四七
銀 (オンス)	四、五五七	四〇五
錫 (トン)	三・七	八六三
ウオルフラム (ハンドレト)	一四・五	一九五
亜 鉛 (トン)	二七〇	一七八九
其 他		一七二
計	三二、四三四	三二、四三四

オーストラリアの製造で注目すべきは金・銀・鐵・鉛・亜鉛・石灰・
 礫である。これらの一九三九年産額を示せば次の如くである。

(單位千磅)

石炭	七、一八七
褐炭	三五一
銅	八九三
金	一〇、〇二六
銀	二、五八五
鉛	七九一
錫	四、〇〇〇
鉄	三、五一三
錳	七一一
亜鉛	九一六
ニッケル	一、〇四四
コバルト	三二、六六二

(註) 不足を推定

付 金

金は一九〇一—一九一〇年頃の最盛期を経て一九三〇年まで毎年産額が漸減したが、一九三一年を劃期として再び漸増した。近年の産額次の如し。

一九三三年	八三〇	六、四〇六
一九三四年	八八六	七、五三六
一九三五年	九一〇	七、九七一
一九三六年	一、一八三	一〇、二五一
一九三七年	一、三八一	一一、九九三

量(千オンス) 價格(千磅)

オーストラリア産額は一八五—一六〇年に世界全産額の四〇%五五を占めてゐたが、一九三一年に僅か二%六一に落ちまたその後上昇して一九三七年には四%を占めるに至り、世界第五位の産額である。(金の輸出については既述した正貨・地金の輸出の項参照のこと。)

銀及び鉛

銀及び鉛の統計は合体して産出するため正確を缺くがその産額は次の如くである。

(單位千磅)

一九三五—六年	四、〇二二
一九三六—七年	四、九五〇
一九三七—八年	五、八二〇

右の内大部分が銀であることは既述の諸表に依つても明らかであるが、鉛は後述の亜鉛と共に世界第二の産額を有してゐる。銀及び鉛の産出次の如し。(括弧内は復額)

年	一九三七—八年		一九三八—九年	
	イギリス向 千オンス	全 産 出	イギリス向 千オンス	全 産 出
銀 (バー・イン ゴット等)	三、三五一	九、一〇六	一九八	九、四二六
銀及鉛	(三六九)	(九八九)	(三一)	(九六九)
コンヤントレート	千トシ (一一〇)	三、四	一	三四
		(四四六)		(四八九)

年	一九三〇—三一年		一九三二—三三年	
	イギリス向 千オンス	全 産 出	イギリス向 千オンス	全 産 出
銀 (バー・イン ゴット等)	四、六八八	一〇、七八一	四、一八八	一〇、三九〇
銀及鉛	(四一)	(一、〇〇六)	(一、〇〇六)	(一、〇〇六)
コンヤントレート	千トシ (一、二二)	(一、二二)	(一、二二)	(一、二二)
		(一、二二)		(一、二二)

銀は主としてイギリス及びインドに産出され、銅、鉛、亜鉛は主としてアメリカ及び若干がアメリカに送られ、亜鉛は殆んどイギリスの獨占、銅は大部分がニュージーランドに向けられてゐる。イギリス製鋼業は既述の産出の大半を占める。ブロークンヒル會社と英約し一ヶ月一萬三千三百三十三トン、年十六萬トンの鉛をトン當り英貨十五ポンド一シリング七ペンスで賣ふことゝなつた。

銅も近來盛んに産行されて居る。次はその産額である。

債 務 及 コンセントレート

一九三三年	五三、一	一、一	三、九三
一九三四年	三九、七	一、二	〇、〇三
一九三五年	六〇、六	一、六	九、九二
一九三六年	七九、六	一、八	〇、六九
一九三七年	一、一六三	一、八	六、九三
一九三五年一六年イギリスは	債権輸出額	三、千トン	中、三、千トンを輸入
したがその後一九三八年一九年は	全額	四、千トン	に減じイギリスは一、九三
七一八年以來オーストラリア	債権を輸入して	居ない。	債権は尙若干輸出
されてゐるがそれも多く	アメリカに行き	イギリスへの	輸送は極めて少
なり。			
一九三七年一八年イギリス向け	千ポンド	二、七	
一九三七年一八年	〇、〇六	一、二七	
一九三八年一九年	〇、〇三	一、三	
一九三八年一九年	〇、〇三	一、三	

錫

錫産額次の如し。

一九三三年	五、四〇	二、九四八	七、二
一九三四年	七、四六	三、一六九	一、五四
一九三五年	七、六三	三、三九五	二、〇七
一九三六年	六、五八	三、一八七	二、二五
一九三七年	八、六三	三、三七七	三、六六

輸出次の如し。

一九三七年一八年	四、六二	一、四七二
	(一一三)	(二八七)

オーストラリアは日本に鐵石を輸出して居たが一九三八年の鐵石輸出禁止以後減じた。イギリス向け鐵石は從來極めて少しあつたが最近は今も輸出しなくなつた。

鐵石輸出

年	鐵石輸出 (千トン)	鐵塊 (千トン)	鐵レール (千トン)
一九二九年	261	232	353
一九三一年	232	228	188
一九三三年	336	392	295
一九三五年	698	696	585
一九三六年	783	820	671
一九三七年	913	1,073	837
一九三八年	929	1,159	906

千ハンドレトウエイト
八、六四六
(三三一千ポンド)

一九三六―七年	五、三四二
(一四四)	
一九三七―八年	三、三五八
(九三)	
一九三八―九年	二、六四三
(八三)	

右の中一九三五―六年には日本は五、八九三千ハンドレトウエイト程輸入したが、一九三八―九年には一、四九六千ハンドレトウエイトに減少した。

而して最近次第に見る如く對英鐵鋼輸出が増加して居り、イギリスの防空避難所にはオーストラリアの鋼が可なり使用されて居ると云はれる。

鐵鋼輸出 (價額)

イギリス向け 全輸出

一九三五年	一	千ポンド	五八二	千ポンド
一九三六年	二		九二四	
一九三七年	〇・六		一三四	
一九三八年	三七一		二四八	

總輸出の大部分はニュージラランドに向けられるもので右四年度にそれぞれ四二千ポンド、六五三三ポンド、八一六千ポンド、八七二千ポンド輸出され日本にも從來二、三萬ポンド程輸出されて居た。

(四) 石炭

オーストラリアの石炭は海岸近く又淺所に賦存するため比較的採行が容易で國內用炭は充分これを充して居る。産額次の如し。(單位千トン、括弧内は價額、千ポンド)

年	石炭	褐炭
一九三五年	一〇、八八七	二、二二一
	(六、四一六)	(三、一一一)
一九三六年	一一、三七〇	三、〇四四
	(六、六六三)	(三、二二二)
一九三七年	一二、〇七四	三、三九三
	(七、三三六)	(三、二二二)

石炭は一九二一年のレコード一二、七九八千トンに僅かに及ばないだけで一九三一年以降着々増産されてゐる。その輸出は次の如し。

(パンカーを添く)	千トン
一九三七年	三九二
一九三八年	(三、四四四) 千ポンド
一九三九年	三八二
	(三、四七四) 千ポンド

右の中、ニュージーランド及びニューカレドニアにそれぞれ十萬ト
ン程輸出する外主として附近太平洋の島々に輸出されて居りイギリスに
は送られて居ないこと勿論である。

(4) ウォルフラム輸出

一九三七—八一年 二、八二八 ハンドレトウエイト

(四三三三—一) ポンド

一九三八—九一年 三、三五〇

(三六六六—五)

オーストラリアの鎊英輸出を議定として付記しておく。

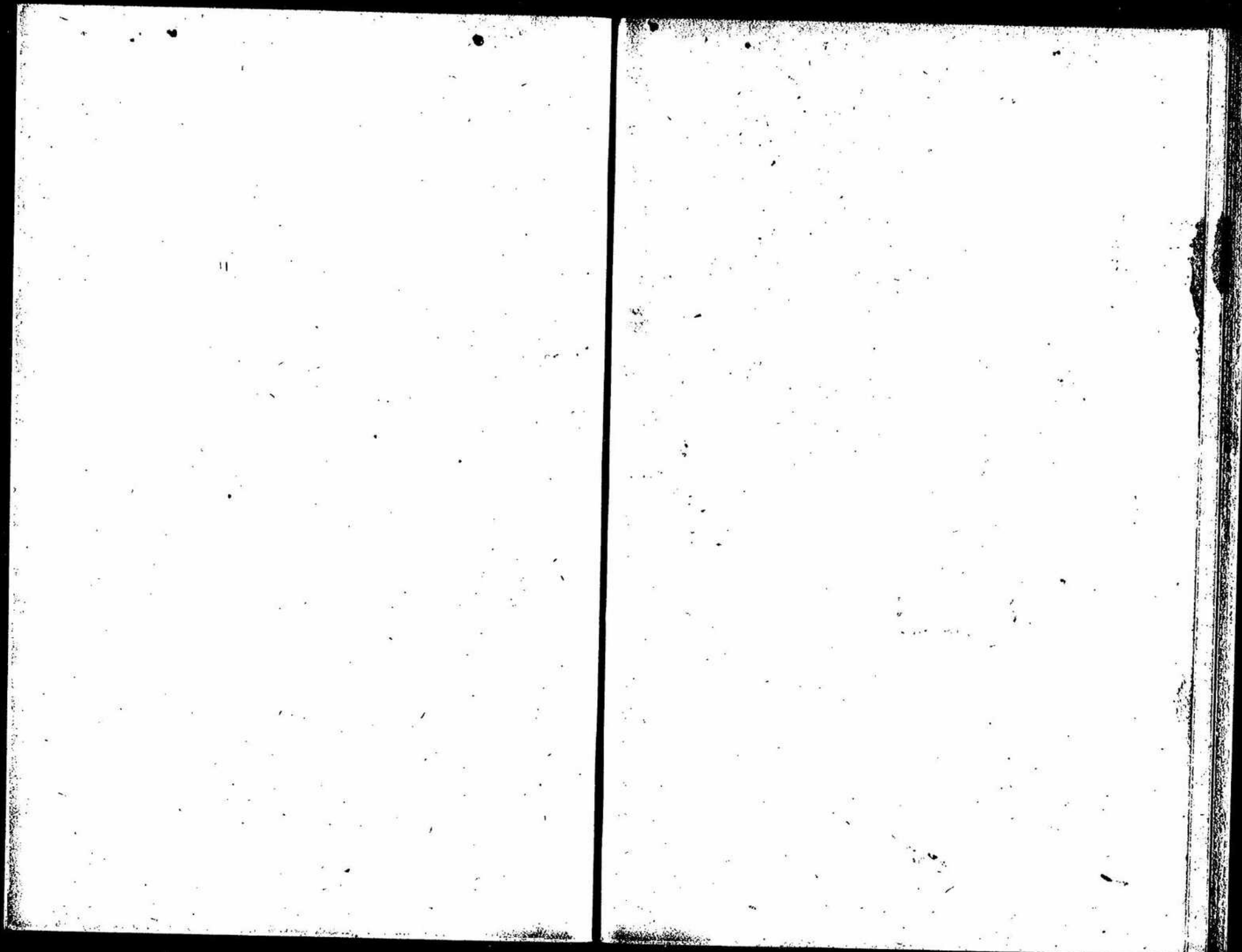
鎊英輸出(一單位千ポンド)

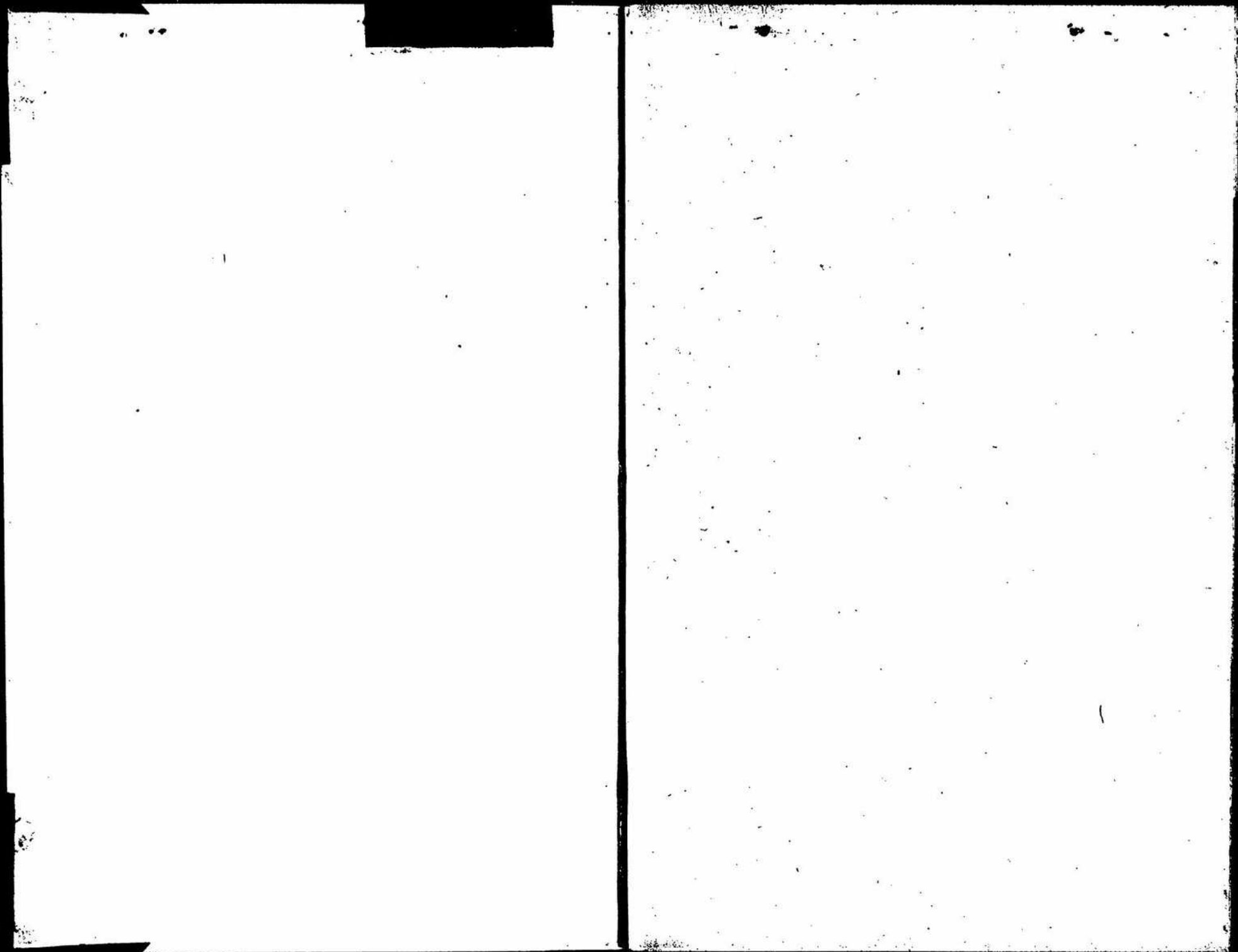
	一九三七—八一年	一九三八—九一年
動物性食糧	二二、七〇九	二四、四八三
植物性食糧	二四、三四四	一四、三九六
酒類	八六三	九〇六
動物性原料	二二、〇二六	一九、四七五
植物性原料	一二七	一〇九
衣料	四九	四〇
漆	二二九	一七九
鐵	一、三九八	八四六
金屬及同製品	五、四〇〇	五、二九一
ゴム、レザー及皮革	四三三	四二二
木材	二九三	二〇六
紙及文具	四四	三二

合計	雜	金銀及青銅貨	化學製品	新造機	貴金屬類
八六、三五九	八六、〇〇三	八、〇七六	一三七	一二	四五
六八、七一六	六八、三九三	二、〇一八	一〇八	一六	三一

寄著

17. 2. 12





291508